



## 平成27年度 神戸大学地域連携活動報告書

神戸大学地域連携推進室

---

**(Citation)**

神戸大学地域連携活動報告書, 2015(平成27年度):1-63

**(Issue Date)**

2016-03

**(Resource Type)**

report

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81009474>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009474>



**平成 27 年度**  
**神戸大学地域連携活動報告書**

**平成 28 年 3 月**  
**神戸大学地域連携推進室**



はじめに

神戸大学では、平成15年から地域連携推進室を設置し、組織的に地域連携活動に取り組んできました。地域課題解決へ向かう実践力は、人文学、保健学、農学の各研究科に設置された地域連携センターの活動や教職員、学生が取り組む公募事業などの中で、日々試され蓄積されてきています。

これらの活動を基礎に、昨秋神戸大学が代表校となって申請した「地域創生に  
応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業が、平成27年度文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に採択されました。

本事業は各大学の地域社会形成のための教育研究成果や県内にある地（知）の拠点大学（COC）4大学（兵庫県立大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学・吉備国際大学）の事業成果と自治体、神戸商工会議所、兵庫工業会、兵庫県経営者協会、神戸新聞社等の実践的人材育成を結合して、地域課題解決に資する人材育成のための教育プラットフォームを構築し、学生の地元定着を目指す取り組みです。大学の持つ「専門知」と地域が培ってきた「社会知」の相互作用によって、地域社会の活力を取り戻すものです。

COC+ 事業の基礎には、10年来行ってきた神戸大学の地域連携活動の取り組みがあります。本学では、地域と大学が共に手を携え、地球規模の視点に立ち、足元の課題解決を見据えながら歩んでいきたいと考えています。

本書は、平成27年度の地域連携活動を一冊にまとめたものです。本学の地域連携活動理解への一助となれば幸いです。今後とも、よろしくご指導、ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

神戸大学地域連携推進室 室長

奥村 弘

# 目 次

はじめに	1
<b>第Ⅰ章 地域連携推進室・研究科地域連携センター等報告（中扉）</b>	<b>3</b>
地域連携推進室	
人文学研究科地域連携センター	
保健学研究科地域連携センター	
農学研究科地域連携センター	
篠山フィールドステーション	
人間発達環境学研究科 発達支援インスティテュート	
<b>第Ⅱ章 学内公募事業活動報告（中扉）</b>	<b>33</b>
地域連携事業	<b>34</b>
板倉 史明 国際文化学研究科准教授	
藤岡 秀英 経済学研究科教授	
西村 善博 医学部附属病院特命教授	
三輪 康一 工学研究科教授	
近藤 民代 工学研究科准教授	
北後 明彦 都市安全研究センター教授	
学生地域アクションプラン	<b>46</b>
平通 奈美 神戸大学アメリカンフットボール部	
藤本 由香里 神戸在宅呼吸ケア勉強会	
堀田 佳那 神戸学生森林整備隊	
一之瀬 学 神戸大学保全生態学研究会	
馬場 加奈子 ささやまファン倶楽部	
募集要項	<b>56</b>
<b>付録（中扉）</b>	<b>59</b>
地域・だいがく連携通信 Vol.17	

# **第1章**

**地域連携推進室・**

**研究科地域連携センター等報告**

# 平成27年度 神戸大学地域連携推進室活動報告書

神戸大学地域連携推進室

## 【概要】

平成18年、教育基本法に大学による社会貢献が明記されて以来、大学による社会貢献の重要性の認識が学内外に広がり、地域課題に資する研究や学生の地域貢献活動への期待は年々高まっている。こうした状況の中、本学は、地域との連携事業を通して、社会実装可能な教育研究フィールドの確保が行われ、同時に大学の地域貢献という使命を果たしてきた。さらに、新たな地域課題に資する学内の研究教育基盤を開発することで、全学的な地域連携事業の更なる推進を図るとともに、協定締結自治体等や大学施設の所在する地域との良好な信頼関係を維持する事業についても、地域連携推進室で支援を行っている。

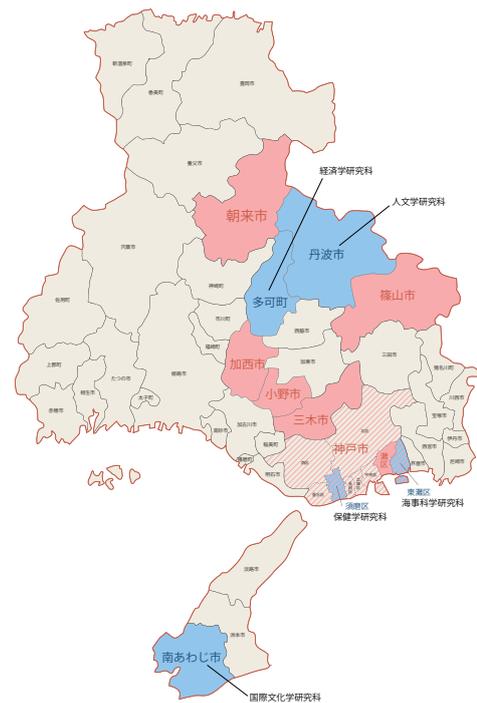
なお、本年度に神戸大学が代表となって申請し、採択に至った文部科学省地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）は、これまでの地域連携事業の研究教育社会実装の経験の上に採択されたものである。今後も、代表校として当事業を推進していくためには、本学における地域連携事業の基盤強化がますます必要である。また、COC+事業の全国的展開は、地域活性が内政的重要課題となったことを示しており、本学内でも地域課題への対応力の継続的支援が求められている。

## 【地域連携の基本理念】

- ① 神戸大学は、学術文化における地域社会の重要な担い手であることを自覚し、この分野における地域社会のリーダーとして、組織的に地域（連携）活動を進める。
- ② 神戸の持つ国際的港湾都市としての文化的な位置を高め、地域から世界へ発信しうる地域連携事業を展開する。
- ③ 兵庫県の多様な地域社会に対応しながら、そこから地域社会の発展、活性化につながる普遍的な課題を全国に発信する。



地域連携推進体制



地域連携協定マップ

- ④ 県内の自治体や地域団体との持続的な連携の継続を進め、長期的な信頼関係を深める。
  - ⑤ 地域連携の成果を生かし、関係自治体等に本学の教育研究フィールドを整備する。
- 以上に基づき、地域連携推進室では、本年度、以下の事業を行った。

## 【活動報告】

### 1. 魅力ある地域づくりへの協力に関すること

#### ① シンポジウム「灘の酒がつなぐ地域と大学」 (H27.8.5)

神戸大学・灘区役所・沢の鶴株式会社との共催で、灘の酒を主役にしたイベントを沢の鶴資料館で開催した。本学で展開されている身近な産学官の取り組みを地域住民に発信するとともに、本学の学生や教職員と地域住民との交流を図った。



灘の酒がつなぐ地域と大学

### 2. 本学と自治体との連携事業の推進に関すること

本学では、現在8つの自治体と大学連携協定を締結している。本年度も引き続き連携自治体との事業の推進や連携推進協議会を開催した。

#### ① 神戸大学と神戸市との連携推進協議会 (H28.2.5)

H25年5月24日に神戸市との包括的連携協定を締結後、第1回目となる連携推進協議会を開催した。当時、年間約80例の連携・交流事業に取り組んでいたが、協定締結にあたって決めた7つのシンボル事業を中心に連携事業の進捗を振り返るとともに、新しい大型の連携事業についての協議を行った。



神戸市との連携推進協議会の様子

#### ② 篠山市・神戸大学連携推進協議会 (H27.10.29)

H22年8月30日に大学協定を締結した篠山市と、第3回目となる連携推進協議会を開催し、関連する各分野の一年の活動計画等を共有するとともに新たな事業についての協議を行った。

#### ③ 神戸大学・神戸新聞社連携シンポジウム

「つなぐ いかす 地域力～みんなでつながる子育て～」(H27.11.28)

神戸新聞社との共催で、上記シンポジウム開催した。特に地域での子育て支援に関し、大学側から専門的見地を提供するとともに、大学・新聞社・地元の子育て関係者らとのプラットフォーム作りに向けてスタートを切った。



神戸大学・神戸新聞社連携シンポジウムの様子

3. 本学における地域連携の組織的な取り組みへの支援に関すること。

① 地域連携事業・学生地域アクションプランの公募地域連携推進室では、教職員や学生が行う地域活性化のための活動を発掘し、支援を行うため平成19年度より公募事業を展開してきた。本年度は、教員を対象とした「地域連携事業」から6件、学生を対象とした「学生地域アクションプラン」から5件を採択し、支援を行った。

② 各研究科地域連携センター等の地域連携事業への支援

人文学研究科、保健学研究科、農学研究科に設けられている各地域連携センターを中心に各部局が実施している様々な地域連携活動に対し、調整的な支援を実施するとともに、自治体や住民団体等との連絡・調整を行い、大学全体の地域連携を推進した。

③ 灘区「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成」

灘区域における地域活性化に資する事業を灘区が支援する「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成」について学内公募を行った。本学の教員から1件、学生団体から2件が採択された。

4. 本学における地域との連絡窓口としての連絡、調整に関すること。

① 神戸市大学連携実務者会議への参加

隔月に開催される「神戸市大学連携実務者会議」に参加し、神戸市及び市内の大学連携担当者と意見交換を行い、近隣大学の地域連携状況の調査を行った。

② 大分県中津市との連携協定締結にむけた調整

本学の前身である神戸高等商業学校の初代校長水島鍬也先生の出身地である大分県中津市との連携協定締結にむけて、関係部局（経済学研究科、経営学研究科）との連携事業調整、および、中津市との調整を行った。

③ 自治体等からの要望に対する窓口調整

【自治体の委員会等への教員派遣依頼について】

- ・三木市 / 三木市創生計画策定検証委員 / 教員1名
- ・三木市 / 情報公開審査会及び個人情報保護審査会 / 教員2名
- ・三木市 / 指定管理者選定委員 / 教員1名
- ・加西市 / 情報審査会 / 教員1名
- ・朝来市 / 竹田地域ビジョン会議 / 教員1名
- ・神戸市 / 新春国際親善パーティー / 教員2名

【自治体の各種要望への学生派遣】

- ・神戸新聞社 / KOBE 防災リーダー育成2000プロジェクト / 学生



●対象テーマ  
地域活性化に関する、自治体・地域団体等と連携した活動

●対象取組事業  
部局の支援のもとに下記の①～③いずれかに該当する事業を対象とします。

- ①協定締結に基づく、もしくは協定締結につながる取組事業
- ②自治体等や地域団体と協同行う萌芽的取組事業
- ③複数部局による取組事業

●支援額及び採択件数(予定)  
支援額 30万～80万円/1件  
採択件数 3～7件

●対象  
全部局及び各センター  
(ただし、人文学研究科、人間発達環境学研究科、保健学研究科、農学研究科をのぞく。)

申請書類や募集要領は、地域連携推進室のホームページからダウンロードできます。  
<http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>

公募受付期間  
平成27年3月25日(水)から  
平成27年4月24日(金)まで

申請書類提出先・問い合わせ先  
研究推進部 連携推進課  
産学官連携グループ(担当:山村)  
(文理風キャンパス正門すぐ連携創造本部棟5階)  
Tel: 078-803-5427、2394  
Email: ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

神戸大学 地域連携推進室

H27 地域連携事業募集ポスター

・神戸新聞社 / 学生編集会議 / 学生

【自治体主催事業への協力】

・神戸市 / 市の政策課題解決に向けた大学発政策研究・提案助成事業 / 2件採択

・神戸市 / 大学生が作るK O B Eの未来に向けた政策提案コンテスト / 2件応募

【自治体等からの相談対応】

・淡路市 / 地域創生についての協力要請

・朝来市生野高校校長 / SGH申請に係る協力要請

・中津市 / 博物館の設置にかかるアドバイス要請

5. その他地域連携の推進に関すること。

① 文部科学省大学改革推進等補助事業「地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+）」への申請及び事業推進

(1) 兵庫県における大学の地方創生事業に対応するため、本学が代表校となり申請を行った。結果、採択となり（年間6800万円）、事業の実施を進めた。

申請や事業の推進にあたって、各機関及び学内関係部署との打ち合わせを行った。（約30回程度）（事業協働機関／神戸大学、兵庫県立大学、神戸市看護大学、園田学園女子大学、兵庫県、神戸市、神戸商工会議所、兵庫県経営者協会、兵庫工業会、神戸新聞社）

（学内関係部署／学務部教育推進課、キャリア支援課、人文学・農学・保健学研究科、都市安全研究センター、連携創造本部、情報基盤センター等）

(2) ひょうご神戸プラットフォーム協議会

(H27.11.12)

COC+ 事業採択に伴い、事業協働機関との協議会を開催し、今後の事業展開に向けて議論を行った。

(3) ひょうご神戸プラットフォーム COC+ 第1回シンポジウム (H28.1.28)

今年度「地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+）」に採択された本学の事業及び、学内の地域連携事業や学生地域アクションプランの成果報告、各研究科地域連携センターの活動報告のため、標記シンポジウムを瀧川記念学術交流会館で開催した。

② 神戸のつどい (H27.8.6)

東京で活躍中の神戸にゆかりのある政界、経済界、官界等の方々に対して、神戸への関心を高めていただく催しである「神戸のつどい」に出展し、神戸市との連携事業について広く説明を行った。

③ 大学力を生かす地域創生懇談会の開催支援 (H27.8.6)

県知事、神戸市長、神戸商工会議所、神戸新聞社社長、兵庫県立大学長、神戸大学長が集まり地域創生のために何かできるか話し合う場が神戸新聞社主導で設けられ、懇談会の開催サポートを行った。

④ 他大学の地域連携状況調査

高知大学や信州大学、文科省等へ訪問し、他大学の連携活動状況や先進事例調査を行った。



ひょうご神戸プラットフォーム COC+ 第1回シンポジウムの様子



# 平成27年（2015）度人文学研究科地域連携センター活動報告

（平成28年1月現在）

大学院人文学研究科（文学部）では、平成14年（2002）から、「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始した。同年11月には地域連携研究員制度を創設し、翌年1月には、構内に「神戸大学文学部地域連携センター」を設置した（平成19年の改組にもとづき、現在は人文学地域連携センターと改称）。

これは阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が県内各地の歴史資料の保全・活用や歴史遺産を活かしたまちづくりを、自治体や地域住民と連携して取り組んでいくことを目的とした事業である。

現在、連携事業は多岐に及んでいるが、おおむね次の四つの分野で事業を進めている。

1. 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力
2. 歴史資料・災害資料の保全・活用
3. 地域歴史遺産を活用できる人材の育成
4. 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

また、昨年度から始まった科学研究費補助金基盤研究（S）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」（研究代表者・奥村弘）のプロジェクトに加えて、今年度より地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」のプロジェクトが、当センターを拠点として展開されている。

このほか年報『LINK【地域・大学・文化】』を刊行するなど、研究および研究成果の公表もおこなっている。

以下、個別事業ごとに今年度の活動の概要を報告する。

## （1）歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

### ■兵庫県との連携事業

○播磨国風土記をめぐる兵庫県教育委員会文化財課との連携

- ・平成24年度以来、センタースタッフが共同研究に従事

○兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室における共同研究への協力

- ・平成27年度より、センタースタッフが共同研究に従事

### ■神戸市における連携事業

○神戸市文書館との連携事業

- ・神戸市文書館企画展「都市と戦争—新資料に見る防空と戦災—」（平成27年11月8日（日）～21日（土）、主催：神戸市文書館、後援：NHK神戸放送局 神戸新聞社、協力：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター）
- ・歴史資料の整理及び公開に関する研究、火～金曜日の午後、学術研究員が文書館にて史料整理とレファレンスに従事した。
- ・新修神戸市史・生活文化編（仮称）の企画への協力、センター事業責任者奥村弘が、来年度から本格的に事業が開始される新修神戸市史・生活文化編（仮称）の企画（内容及び執筆者の検討）に加わり助言した。

○神戸を中心とする文献資料所在確認調査

- ・平成28年1月24日新在家ふれあいのまちづくり協議会主催講演会に協力し、演者として河野未央氏（尼崎市立地域研究資料館）を紹介した
- ・神戸市教育委員会と連携し、今年度より『神戸市文献史料』編纂に当センターが協力することとなった
- ・神戸大学附属図書館社会科学図書館所蔵の郷土史料に整理作業に協力し、山本康司氏を派遣して、平成27年10月1日より12月15日まで附属図書館資料館「村上家文書の世界」へ協力した。

○財団法人住吉学園（住吉財産区）との連携事業

- ・住吉歴史資料館において地元有志と共に同館運営活動に従事した（毎週木曜日）
- ・平成27年3月、地元民よりの聞き取りを中心とする『阪神淡路大震災資料Ⅰ』を発行した。

■大学協定に基づく小野市との連携事業

- ・小野市立好古館特別展「江戸時代の産業経済の発達～小野市市場地区」（平成27年10月31日（土）～12月20日（日）、主催：市場地区地域づくり協議会、コミュニティセンターいちば、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、小野市立好古館、協力：市場地区各自治会、後援：小野の歴史を知る会）

■連携協定に基づく朝来市との連携事業

- ・生野町奥銀谷自治協議会とともに山田家文書の整理会を実施
- ・生野書院において、石川家文書の整理会を実施
- ・平成28年3月に、山田家文書・石川家文書整理会にかんする展示を予定

■丹波市における連携事業

○人文学研究科との「歴史遺産を活用した地域活性化」をめざす協定（平成19年8月締結）にもとづく丹波市との連携事業

- ・6町巡回の連続講座「丹波の歴史文化を知る・つなぐ」の開催（全6回）
- ・市内自治会文書調査（春日町棚原自治会、氷上町氷上自治会）

○丹波古文書倶楽部の開催支援

- ・毎月第2土曜日に開催される例会に木村修二がチューターとして参加した

■連携協定に基づく加西市との事業

○青野原俘虜収容所関連イベントへの協力

- ・「JR青野ヶ原駅コミュニティールーム資料展示」平成27年8月～12日（地域連携センター主催）
- ・「再現サッカー大会（俘虜と日本人との間で行われたサッカー大会の再現）」平成27年11月3日（火・祝）（地域連携センター主催）
- ・「ウォーキング俘虜がやってきた道」平成27年12月12日（地域連携センター主催）
- ・「青野原フォーラム（仮）」平成28年3月5日予定（地域連携センター主催）

○青野原俘虜収容所関連冊子の発行

- ・青野原俘虜収容所について紹介・解説した冊子を3月に発行予定

■篠山市との連携事業

- ・篠山市立中央図書館「地域資料整理サポーター」の活動支援（月1回程度）
- ・神戸大学文学部・大学院人文学研究科「地域歴史遺産保全活用演習」の開講、市民からの一般参加もあり（於：神戸大学篠山フィールドステーション）

■尼崎市における連携事業

- ・市制100周年記念事業の一環である新市史の編纂に協力。編纂の企画には、尼崎市立地域研究史

料館の専門委員を務める市澤哲が協力し、執筆には村井良介、古市晃、市澤らが携わった。新市史は、平成28年10月の発刊の予定

- 尼崎市立文化財収蔵庫が主催した展覧会『尼崎の南北朝』の学術講演の講師を市澤が務めた(平成27年10月31日)
- 平成28年1月24日に開催された「尼崎市制100周年記念歴史遺産保存活用シンポジウム」の企画に協力し、当日は市澤哲がコーディネーターを務めた

### ■三木市との連携事業

#### ○新三木市史編さん事業

- 「三木市と国立大学法人神戸大学との連携に関する協定書」(平成25年6月締結)に基づき、新三木市史編さん事業に向けた受託型協力研究を実施
- 「市史編さんシンポジウム『新三木市史に期待する』」開催(平成27年9月26日、於：三木市中央公民館)

#### ○旧玉置家住宅文書保存事業

- 『玉置家文書目録：古民家の史料調査研究報告書 下』の編集・刊行(平成28年1月予定)

#### ○神戸大学文学部・大学院人文学研究科「地域歴史遺産活用企画演習」

- 平成28年2月23日・24日実施予定

### ■三田市との連携事業

- 九鬼家資料の調査・撮影

### ■明石市との連携事業

#### ○「明石藩関連資料調査・公開業務委託」業務

- 平成27年12月23日より1月31日まで、企画展「明石藩の世界Ⅲ」を明石市立博物館・明石市教育委員会とともに主催した

#### ○『明石市史』編纂事業関連

- 「明石市における地域史料の調査研究業務委託」に従事し、明石市史編纂室と連携して明石市域の古文書の所在確認調査などを行った

### ■たつの市に関する連携事業

#### ○神戸大学近世地域史研究会

- 研究会：平成27年4月19日(日)、5月17日(日)、7月12日(日)、9月6日(日)、10月4日(日)、11月1日(日)、12月6日(日)平成28年1月11日(月・祝)、2月21日(日)、3月20日(日)

- ・たつの市龍野町善龍寺所蔵史料調査：平成27年5月25日（月）・26日（火）、6月22日（月）・23日（火）

#### ○『播磨新宮町史』

- ・たつの市立図書館の新宮分館が開催した「『播磨新宮町史』を読む」連続講座に、市澤哲が12月6日の中世分野の講師を務めた

#### ■淡路市への協力

- ・平成27年5月14日、淡路市教育委員会とH家資料の調査（奥村弘・吉川圭太・川内淳史ほか参加）

#### ■佐用町との連携事業

- ・市域の利神城を国指定史跡にする準備委員会に市澤哲、村井良介が委員として参加。8月8日、9月26日に報告書作成の会議を行い、12月20日には、現地踏査を行った

#### ■福崎町との連携事業

- ・福崎町立柳田國男・松岡家記念館記念展への展示協力（資料調査・図録作成への協力）。記念展「松岡鼎展～柳田國男を導いた兄～」平成27年7月25日（土）～11月23日（月・祝）（地域連携センター協力）
- ・松岡家関連資料の調査・デジタルデータ化・目録化作業
- ・工学研究科と共同で、福崎町辻川地区のジオラマ作成およびワークショップを実施。「辻川界限ジオラマワークショップ」平成27年8月8日（土）～8月12日（水）（地域連携センター協力）
- ・『広報ふくさき』誌上で研究成果の報告

#### ■猪名川町における連携事業

- ・猪名川町・関西大学・兵庫県立歴史博物館とともに「川辺郡猪名川町における多田院御家人に関する調査研究」にプロジェクトメンバーとして参画し、N家文書および平尾家文書の調査に従事した
- ・猪名川町中央公民館主催の歴史講座「歴史にふれる古文書を読む」（毎月第3土曜開催）に、木村修二が講師として参加した

#### ■姫路市香寺町における連携事業

- ・古文書講座 月2回（年24回）
- ・香寺町史を読む会 5回・県民交流会館・共催
- ・町内巡検 香寺町田野・12月6日・協力
- ・土師資料展示会 香寺町土師・8月15～16日・協力
- ・史料保存で要望 市教委訪問・8月20日・奥村弘と大槻守

#### ■西脇市との連携事業

- ・西脇市と人文学研究科との間で協定が締結され、連携事業を開始することとなった

#### ■大分県中津市との連携事業

- ・中津市と神戸大学との協定が締結にもとづき、連携事業をおこなうこととなった

## （2）歴史資料・災害資料の保全・活用

#### ■歴史資料ネットワークへの協力・支援

##### ○資料レスキュー活動への支援

- ・平成27年10月、関東・東北豪雨災害につき常総市役所水損公文書のレスキュー活動に参加（吉川圭太・加藤明恵・小野塚航一）

##### ○奥平野村古文書勉強会

- ・毎月第2日曜日に開催される例会に、木村修二がチューターとして参加した。

■石川準吉関係資料の調査

(3) 地域歴史遺産を活用できる人材の育成

- 現代GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供

○地域歴史遺産保全活用基礎論A、

B…地域歴史遺産の保全・活用のための基礎的講義（リレー形式。前後期とも金曜1限に開講）

○地域歴史遺産保全活用演習…篠山市内の古文書を用いた合宿形式の演習を開催（9月）

○地域歴史遺産活用企画演習…市民とともに地域文献史料の活用を図る専門的知識を得るための実践的演習を2月に開催予定（三木市にて）

■教員養成GP「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業を定着させる活動

○「地歴科教育論C」の開講（前期）

■平成22年～24年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を定着・普及させる活動

○まちづくり地域歴史遺産活用講座の開催

- ・神戸大学文学部公開講座、平成27年10月17日（土）・18日（日）、於：神戸大学文学部、主催：人文学研究科・地域連携センター、共催：兵庫県教育委員会、後援：神戸市教育委員会・灘区
- ・平成28年3月13日（日）、姫路市香寺町において開催予定

○平成27年度まちづくり地域歴史遺産活用講座オプションプログラム古文書解読初級講座

- ・平成27年11月5日、12日、19日、26日、於：神戸大学文学部学生ホール、講師：河島裕子氏

(4) 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

■第14回歴史文化をめぐる地域連携協議会

- ・テーマ「地域で歴史を学びあうことのおもしろさ」、於：神戸大学瀧川記念学術交流会館、105名参加予定（平成28年1月24日現在）

■第4回地域史惣寄合 in 和泉

- ・企画・報告にセンタースタッフが参加

日本留学の父・田中家  
「この一冊の書の内容を生きて」  
「この一冊の書の内容を生きて」  
「この一冊の書の内容を生きて」

柳田國男 松岡家記念館開館14周年  
松岡鼎展 155年・柳田國男生誕143年記念展

松岡鼎展 柳田國男を導いた兄

平成27年7月25日（土）～11月23日（月・祝）  
開館時間 9:00～16:30（入館は16:00まで）  
休館日 月曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日  
入館料 無料  
主催 福崎町教育委員会  
主協 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター  
協 福崎町立柳田國男・松岡家記念館  
兵庫県神崎郡福崎町西田 1038-12 TEL 0790-22-1000 <http://www.town.fukuzaki.hyogo.jp/hta/kinenkan/>

展示会  
多田院御家人の家  
観並田中家

平成27年2月3日（火）～3月1日（日）  
場所 生涯学習センター  
コニエックション広場  
観並田中家（観並田中家）  
「はじめて明かされる多田院御家人」

問い合わせ 猪名川町教育委員会生涯学習課  
電話 072176712600  
主催 兵庫県立文化遺産活用活性化実行委員会  
共催 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター  
福崎町教育委員会

第14回  
歴史文化をめぐる地域連携協議会

地域で歴史を学びあうことのおもしろさ

2016年1月31日（日）11:00～17:15  
神戸大学瀧川記念学術交流会館

11:00～11:10 主催挨拶  
11:10～11:20 観音院（挨拶、神戸大学地域連携推進室）

第1部 活動報告  
11:20～11:35 観音院（神戸大学瀧川記念学術交流会館）  
11:35～11:50 井上順子氏（福山市民会館）  
11:50～12:05 小原 康彦氏（神戸大学文学部）  
12:05～12:20 懇談・交流会

第2部 シンポジウム「地域で歴史を学びあうことのおもしろさ」  
12:30～13:50 観音院（神戸大学瀧川記念学術交流会館）  
13:50～14:30 川口純氏（兵庫県立歴史博物館）  
14:30～15:10 松岡鼎展（兵庫県立歴史博物館）  
15:10～15:40 津野美恵子氏（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター）  
15:40～16:00 交流会  
16:00～17:15 全体閉会  
17:30～19:00 懇談会（会費別）

近年各地で、地域歴史遺産を活用したまちづくりの取り組みが、住民自身の手でおこなわれています。この講座は、こうした取り組みに関心をもち、市民のみなさんに向けて、地域の歴史についての考え方や見方を学ぶ機会を提供する試みです。

「こういう考え方がある」「こういうこともできる」など、地域の歴史に関心を持ち、地域づくりに役立てていく入口になればと考えています。

2015年  
受講者募集

定員：20名  
応募が定員を超えた場合は抽選をおこないます

2015年10月17日（土）・18日（日）  
会場：神戸大学文学部（B棟小ホール）

申し込み先住所  
〒657-8501 神戸市灘区中町1-1  
神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター  
TEL FAX 078-803-5566  
e-mail [shinsei@kobe-u.ac.jp](mailto:shinsei@kobe-u.ac.jp)  
<http://www.kobe-u.ac.jp/shinsei/>

主催 神戸大学大学院人文学研究科・地域連携センター  
共催 兵庫県教育委員会  
後援 神戸市教育委員会、神戸市灘区

【応募条件】 2日間の全日程を受講できる方。  
【申込方法】 書面での申込に必要事項を記入の上、FAXにてお申し込みください。申込は抽選受付（20名）です。抽選結果は2月上旬末までにご案内いたします。必要事項をご記入の上、eメールでお申し込みください。

FAX番号 078-803-5566  
eメールアドレス [shinsei@kobe-u.ac.jp](mailto:shinsei@kobe-u.ac.jp)  
〒657-8501 神戸市灘区中町1-1 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター  
（申込締切） 2015年10月5日（月）必着

## (5) 地域連携センターを拠点とするプロジェクト

- 平成26年度～30年度・科学研究費助成金・基盤研究（S）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」
- ・国際会議「文化財防災体制についての国際比較研究」（平成27年10月22～23日、於：神戸大学文学部／平成27年10月27日、於：東北大学災害科学国際研究所、地域連携センター協力）
- ・公開フォーラム「文化財防災体制についての国際比較研究」（平成27年10月24日、於：神戸大学瀧川記念学術交流会館、地域連携センター協力）
- ・第16回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会（平成28年1月22日、於：神戸大学附属図書館フロンティア館、「第5回被災地図書館との震災資料の収集・公開に係る情報交換会」並びに科研Sグループ「第6回地域歴史資料学研究会」と共同開催）
- 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」
- ・平成28年1月より、「歴史と文化」領域のコーディネーターに村井良介が就任し、プラットフォーム構築に向けた調査・研究事業に着手

## (6) 地域連携研究と研究成果の公表

- 年報『LINK【地域・大学・文化】』7号の刊行
- ・平成27年12月刊行、特集「“地域の再生”と歴史文化Ⅱ—自治体消滅論・地方創生と市民社会—」
- 地域関連研究
- ・地域連携センタースタッフによる科学研究費補助金研究
- ・講演、市民講座等の活動

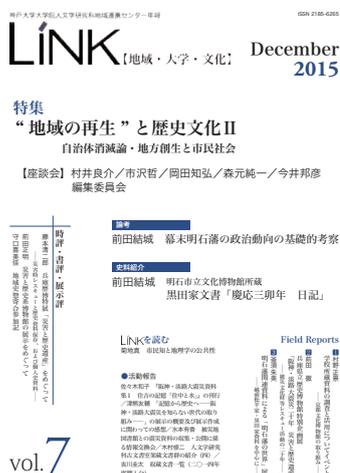
（文責 地域連携推進室特命講師・村井良介）

人文学研究科地域連携センター

TEL 078-803-5566 E-mail area-c@lit.kobe-u.ac.jp

URL <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/>

（詳細な活動報告は平成28年3月刊行予定の事業報告書をご参照ください）



## 平成27年度

# 神戸大学大学院保健学研究科地域連携センター活動報告書

### 【概要】

平成27年度の保健学研究科地域連携センターは、委員11名からなる運営委員会によって運営されてきた。事業としては、①周産期に問題を持つハイリスク児とその家族への支援、②神戸市、篠山市における発達障害児・者とその家族への支援、③医療的ケアを必要とする子ども達への支援と家族・教員の研修、④国際的視点から見た地域連携、⑤認知症のある高齢者とその家族の生きがい支援事業、⑥医療と福祉の連携による障害者への生活支援事業、⑦高次脳機能障害者への ICT を用いた支援活動、⑧ Assistive technology を用いた在宅高齢者の支援、⑨思春期・青年期の発達支援活動、⑩児童発達支援事業所に対する巡回支援活動の10事業を実施した。さらに、障害者理解のためのシネマカフェを1年間で3回開催するとともに、第3回障害者福祉機器展、おいでやすカーニバル、認知症に関する研修会、検診・講演会を社会福祉法人、NPO 法人や自治体と共催した。10事業の成果に関しては、平成28年2月6日に地域連携活動報告会（ラッセホール）で担当グループスタッフが報告した。報告会には、自治体担当者、神戸新聞関係者を含め約50名が参加し、活発な討議が繰り広げられた。平成28年2月14日には、同じくラッセホールにおいて、“第5回災害時の要援護者に対する支援セミナー ―東北から神戸へ―”を開催（神戸市、神戸市教育委員会、神戸大学都市安全研究センターが後援）し、神戸市立学校支援学校教員、大学院生、NPO 法人関係者など約80人が参加した。

神戸大学における地域連携事業は、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）に採択された。私たちは、その一環として神戸新聞社と連携して兵庫県下の子育て支援事業のネットワーク化を行うこととし、兵庫県下の情報サイト“スキップ”を立ち上げた。11月28日には、キックオフセミナーを松方ホールで行った。さらに、農学研究科、人文学研究科地域連携センターと協働して、篠山市のフィールドステーションを有効活用できるようにと、子育て世代と高齢者が共に安心して暮らせるコミュニティづくりの提案を行ってきた。その手始めとして、篠山マラソンを大学院生が中心となってサポートすることとした。須磨区、篠山市を中心に子ども、壮年期、高齢者の幅広い世代の健康問題を検討することにより、持続可能な社会づくりを推進して行く予定である。

### 【活動内容】

#### ① 周産期に問題を持つハイリスク児とその家族への支援事業

極低出生体重児（出生体重1,500g未満の赤ちゃん）とその家族を対象とした“YOYOクラブ”を、神戸市総合児童センターにて毎週火曜日午前中に開催した。現在、出生3カ月～2歳6カ月までの4つのクラスを運営しており、通常クラス（計25回）に加え、夏祭り（8月）、遠足（9月：1回、10月：1回）、クリスマス会（12月：2回）を実施した。さらに、今年度は、“乳幼児期の発達”、“乳幼児期の遊び”、“感染症予防”、“事故防止”の4つのテーマに関して家族研修会を実施した。1回の研修は約2時間で、高田が90分の講義をし、その後30分の質疑応答を行った。すでに教室を卒業した子どもたちとその家族も参加し、大変好評であった。神戸大学大学院保健学

研究科、甲南女子大学・神戸親和女子大学臨床心理学科の大学院生がボランティアとして参加しており、貴重な研究フィールドともなっている。今年度は、双胎児と母親の睡眠行動の発達、極低出生体重児における共同注意行動の特徴について、ご家族の協力を得て研究を進めてきた。



教室風景（絵本読み聞かせ）



夏祭りの風景（ヨーヨー釣り）

## ② 神戸市、篠山市における発達障害児・者とその家族への支援事業

“灘ぽっとらっく”、“すまいるぽっとらっく”は、いずれも就学前の“発達が気になる子どもとその家族のための教室”である。この二つの教室では、保護者が発達障害について学ぶ講習会プログラムと学生や保育士、保健師、地域のボランティアの託児による子どもプログラムを実施している。“灘ぽっとらっく”は、神戸大学子育て支援施設“あーち”、“すまいるぽっとらっく”は青陽須磨特別支援学校において実施されており、各々、神戸市東部、西部の子どもたちを中心に受け入れている。平成27年度には、計21回（2月までに19回を実施、3月にさらに2回を予定）の教室を実施予定である。平成27年4月～12月までの参加者は、灘ぽっとらっくで、家族89名、子ども73名、ボランティア106名であった。一方、すまいるぽっとらっくには、家族92名、子ども98名、ボランティア135名が実施した。また、8月に実施した就学後の集いには、家族43名、子ども36名、ボランティア53名が参加した。

TEACCHプログラムに基盤を置いた個別支援教室“星の子”は、神戸市社会福祉協議会との連携活動として須磨区鷹取児童館において療育活動を実施している。年間で自閉スペクトラム症と診断された12人の子どもたちを対象に療育プログラムを提供するとともに家族の研修教室を開催してきた。以下に実施状況を表示する。

専門療育プログラム：個別支援教室「星の子」の実施状況

日 程		内 容		参加者数	
		テーマ	講 師	参加者	スタッフ・ボランティア
上半期 4月～9月	4月16日(水)	検査・面談	星の子 川野まき子 氏	2組	14
	4月23日(水)	検査・面談		2組	12
	4月30日(水)	アセスメント	神戸大学大学院 保健学研究科長 高田 哲 氏	—	13
	毎週水曜(月4回) 計16回	専門療育プログラム教室		延50組	163
	5月15日(金)	学習会 自閉症ってどんな障害？	元養護学校教員 山根 弘子 氏	5	24
	6月11日(木)	コミュニケーションの力をつけよう		17	34
	7月9日(木)	ソーシャルスキルを身につけよう		16	25
	7月15日(水)	不適応行動にこめられたメッセージ		14	29
	9月17日(木)	自立をめざして ～今すべきこと		17	19

日 程		内 容		参加者数	
		テーマ	講 師	参加者	スタッフ・ボランティア
下半期 10月～3月	10月15日(木)	検査・面談	星の子 川野まき子 氏	2組	10
	10月22日(木)	検査・面談		2組	9
	10月29日(水)	アセスメント	神戸大学大学院 保健学研究科長 高田 哲 氏	—	11
	毎週水曜(月4回) 計15回	専門療育プログラム教室		延55組	148
	11月11日(水)	学習会 自閉症ってどんな障害？	元養護学校教員 山根 弘子 氏	17	18
	11月28日(土)	コミュニケーションの力をつけよう		12	16
	12月10日(木)	ソーシャルスキルを身につけよう		16	18
	1月22日(金)	不適応行動にこめられたメッセージ		10	18
	2月10日(水)	自立をめざして ～今すべきこと		11	12

思春期前期の子ども達を対象に、神戸市、NPO 法人アスロンと協力して、小学高学年、中学生の発達障害の子どもと家族のために、あじさいキャンプを実施している。今年度からは宿泊キャンプを2回に増やし、そのうち1回は、子どもたちだけのキャンプとした。日帰りキャンプは5月2日に、第1回目の宿泊キャンプは8月29-30日、第2回目は10月3-4日に行った。

③ 医療的ケアを必要とする子ども達への支援と家族・教員の研修事業

神戸市教育委員会と協力して、特別支援学校において教職員が経管栄養などの医療的ケアに安

全に参加できるシステムづくりを行ってきた。研修事業の立案のほかに各学校への巡回指導、修学旅行、キャンプへの小児科医師付き添いを兵庫県立こども病院、にこにこハウス療育センターと協力して実施してきた。

学校名	日時	テーマ	派遣専門職
友生支援学校①	7月14日	経管栄養・吸引等（手技・姿勢等）	医師、看護師、理学療法士
友生支援学校②	12月1日	経管栄養・吸引等（手技・姿勢等）	医師、看護師、理学療法士
垂水養護学校①	7月2日	個々のケアにおける問題点	医師、看護師
垂水養護学校②	11月12日	個々のケアにおける問題点	医師、看護師、理学療法士
青陽須磨支援学校②	9月25日	個々のケアにおける問題点	医師、看護師、理学療法士

#### ④ 国際的視点から見た地域連携事業

海外からの研究者・医療者と地域連携に関連する知識を共有するために研究者間の交流を実施している。平成27年度には、インドネシアのガジャマダ大学から2名、アイルランガ大学より教員1名（計3名）を2か月間ずつ客員研究員として受け入れた。また、博士後期課程にはインドネシアからの大学院生1名が在籍しており、神戸市で私達が行っている‘発達障害のある子どもへの支援活動’や‘ハイリスク児を持つ親への育児支援活動’の体験研修を行ってきた。平成28年1月20日～30日の間、ネパールのトリプバン大学から、小児外科ポカレル教授を招待してネパール大地震についての概要とネパールにおける子どもの状況について講義を行った。一方、私たちは、ジャワ島中部地震の被災地バンツール地区において、ガジャマダ大学と共同で‘子どもの家’を9年間運営してきた。世界力展開強化事業や兵庫県海外研究者派遣事業とも密接にリンクさせながら、コミュニティからグローバルへの展開を進めている。私たちが神戸市で行っているコミュニティを基盤とした支援事業は、開発途上国にも効率的に応用できると高い評価を得ている。



インドネシア子どもの家での活動



国際セミナーでの大学院生間交流

#### ⑤ 高齢者・認知症の人と家族の生きがい支援事業

在宅認知症高齢者と家族を対象に「その人らしさと尊厳ある社会」に焦点をあて、3つの事業を展開している。1) 地域高齢者、家族及び医療福祉関係者への啓発・実践力向上支援事業による研修会・講演会の開催、2) 地域高齢者へ向けた認知症予防支援事業による年一回の認知症無料健診、3) 在宅認知症高齢者のための生きがい支援事業として、学生ボランティアによる現在

の介護保険サービスにはない、その人のライフコースに添ったその人らしく生きるための生きがい支援（例：卓球、水泳、活花、ボウリングなど活動範囲拡大支援）を展開している。今年度はとくに1）、2）について、3）の症例検討も含めた研修会、検診、講演会を実施した。



講演会の状況

#### ⑥ 医療と福祉の連携による障害者への生活支援事業

学生の障害者福祉施設でのボランティア活動、地域交流事業における後方支援、障害者福祉施設に勤務するケアスタッフの実践力向上の支援（学習会）を柱とし、事業を展開している。平成24年度より、障害者福祉施設内のボランティア活動だけではなく、施設利用者の方の外出機会支援の一環として、保健学科学園祭「名谷祭」への参加支援を開始するとともに、今年度は神戸市立須磨翔風高校からボランティアの学生1名を受け入れ、共に活動を行った。また、ケアスタッフに対する実践力向上支援の機会として、「うつ症状を持つ方への対応」をテーマに学習会を開催した。



学生による介助



学習会

#### ⑦ 高次脳機能障害の方への活動

今年度も、宝塚市小林にある地域活動センター「わかば」において、高次脳機能障害の認知リハビリテーションを、週に1回のペースで、教員及び院生ボランティアの計2-3名で行った。今年度の認知リハは1クール約15回×3回、ご家族と当事者との面談を3回行った。認知リハの内容は、1) 身体のメンテナンス、2) 生活における遂行機能能力向上、3) 五感を鍛えるなどをプログラムに取り入れた。体のメンテナンスは、ピラティスやブレインジムに加え、院生に

妖怪体操を伝授してもらい、「孫と踊れる」と喜んでもらった。ピラティスは、阪神競馬場の広い芝生や公民館を借りて行った。生活での遂行機能は、高次脳機能障害者にとって、一番苦手だが、日帰り旅行の計画や新年会の計画・実行・発表を行った。五感を鍛えるは、今年度からハンドベルを導入し、クリスマス会にはその腕前を披露してもらった。今年度最後の認知リハは、2月4日で、新年会の企画は、レクリエーション大会を予定している。



ハンドベルの練習

#### ⑧ Assistive technology を用いた在宅高齢者の支援

高齢者の方の在宅を訪問調査し、認知機能の低下により使用が難しくなってきた家電製品の使用等について、問題点について少しでも解消するべく Assistive technology (AT) を提供している。今年度は、認知症の方だけでなく、高次脳機能障害の方への AT 支援を考えている。記憶補助アプリあらた(株式会社インサイト社)に、文部科学省の研究費で開発したガスコンロ消し忘れ防止装置をつけ、「料理を作りたいけど、ガスを消し忘れるから作っていない」と言われていた記憶障害の方の在宅に設置してきした。ヘルパーさんと相談し、日曜日に味噌汁作りから始めてくださるとのことであり、障害のある方の生活の問題が少しでも解決する支援を行なっていった。

#### ⑨ 思春期・青年期の発達支援活動

平成25年度(26年3月)まで3年間行っていた神戸市発達障害者支援センターとの連携モデル事業を経て、平成26年度からは正式に思春期・青年期発達支援事業が立ち上がり、神戸市発達障害者支援センターと協力して活動をしている。この事業は相談事業の「あっとらんど」と居場所事業の「Be・ユース」の2つの部門があり、発達上の問題を抱える児童・生徒への支援を目的にそれぞれ月に2回実施している。相談事業では臨床心理士が中高生とその家族を対象にカウンセリングを実施し、居場所事業では作業療法士が高校生・大学生を対象に、生活に必要な技能や就労、進学に必要な社会的技能を体験できるような活動を提供し、様々な活動を通して利用者自身の自己理解を促すように支援を行っている。

平成27年度は平成27年12月まで16回活動を行い、相談事業「あっとらんど」の利用者は延べ92件(このうち今年度新規相談件数は36件)であった。居場所事業「Be・ユース」の登録者は11名で(今年度新規登録者は2名)、活動参加者は延べ37名であった。居場所事業「Be・ユース」の活動内容は、将来の社会参加を想定した活動として「ビジネスマナーについて」や「インターネット・SNSについて」などの研修や体験、適応技能の向上を目的とした活動として「身だしなみについて」や「調理」の体験、余暇活動の提案とした活動として「スポーツ」や「クリスマス会」などを行い、また、自己理解に対する支援を行った。

## ⑩ 児童発達支援事業所に対する巡回支援活動

この事業は平成26年10月より発達障害支援センターと連携して、神戸市内における児童発達支援事業所の質を確保する支援システムを構築することを目的に活動を始めた。児童発達支援事業は地域に密接した機関としては重要だが、専門職種が配置されていないところも多く、発達に問題がある児童への支援が十分に整備されていないのが現状である。この事業では作業療法士と福祉職員が連携して、各事業所からの相談（事業運営、設備、個別ケースに関する相談 など）を受け、月に2回程度直接事業所に訪問して支援をい、事業所スタッフへの研修（年間2回程度）を定期的に実施するように計画した。

平成27年度は、研修会を2回開催し、巡回支援は8事業所を対象に10回行った。事業所からの相談内容は、「子どもの特性にあった支援方法について」「遊びや活動内容に対する助言」などが比較的多くみられた。作業療法の視点を活用した巡回支援の結果はおおむね良好で、「具体的に教えてもらって、すぐに活用できた」「全職員の共通理解につながった」「環境面や教材の使い方についても新しい知見がもてた」といった意見があり、巡回支援の必要性が感じられた。

### 【保健学研究科地域連携センターが主催・後援等したセミナーと活動】

- 平成27年6月19日：研修会「その人らしい在宅生活を継続するための認知症高齢者への生きがい支援のヒント」・「もの忘れ外来について」、神戸大学医学部保健学科（保健学研究科地域連携センター・高齢者・認知症の人と家族の生きがい支援研究会と共催）
- 平成27年7月29日 篠山市母子保健研修会 ライフステージに応じた支援 ～発達障がいのある子どもたちとその家族とともに～（篠山市と神戸大学との連携事業 講演）
- 平成27年8月2日：「発達の気になる小学生とその家族のための支援教室」、市立青陽須磨支援学校（保健学研究科地域連携センター 須磨区地域自立支援協議会 共催）
- 平成27年9月5日：第6回 Cinema café、神戸市立友生支援学校 住吉分校（神戸大学保健学研究科主催）
- 平成27年9月23日：第35回おいでやすカーニバル、神戸聖隷福祉事業団（神戸聖隷福祉事業団・神戸聖生園・友生園・愛生園 主催、保健学研究科地域連携センター 協賛）
- 平成27年11月6日：認知症予防のための年1回の無料定期検診と認知症と予防の話、神戸大学医学部保健学科（保健学研究科地域連携センター・高齢者・認知症の人と家族の生きがい支援研究会と共催）
- 平成27年11月8日：「認知症の診療と実際の対応」、神戸大学医学部保健学科（保健学研究科地域連携センター・高齢者・認知症の人と家族の生きがい支援研究会 共催）
- 平成27年11月28日 神戸新聞・神戸大学連携シンポジウム「つなぎ いかす 地域の力～皆でつながる子育て」～
- 平成28年1月9日：第7回 Cinema cafe、（神戸大学医学部保健学科地域連携センター主催）
- 平成28年1月23日：篠山市・神戸大学地域連携フォーラム、丹南保健福祉センター
- 平成28年2月6日：第10回地域連携センター報告会、ラッセホール（保健学研究科地域連携センター 主催）
- 平成28年2月14日：第5回災害時の要援護者に対する支援セミナー、ラッセホール（保健学研究科地域連携センター 主催）

# 神戸大学大学院農学研究科地域連携センター2015年度活動報告書

## 神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

農学研究科地域連携センターは、大学が保有する知識や技術を、農山村地域社会の問題解決において、積極的に活用し、地域社会に貢献することを目的として、2003年度に創設された。

本センターは、地域と農学研究科を結ぶ拠点となり、地域からの多様なニーズを共同の研究プロジェクトにつなげたり、地域での研究者や学生らの実践活動を支援したり、中間支援の役割を担う。また同時に本センターが中心となって、共同研究、セミナー、ワークショップ、意見交換会などの地域交流を積極的に実施し、社会貢献をすすめている。

農学研究科は、「食料・環境・健康生命」に関わる諸問題を専門的かつ総合的に教育研究することを基本目的としている。地域と知を共有し問題解決に貢献することにより、ともに発展することを目指した活動を推進している。

## I 地域共同研究

### 1. 連携センター自主研究

地域連携センターの研究者が中心となり、自治体や住民団体、NPO、協同組合等とともに、地域の課題解決や持続的発展に寄与する調査研究をおこなっている。

- 1) ニホンザルの遊動域と農家の営農実態の変化を通じたサル対策関連施策の評価
- 2) 農産物交流と都市住民の「農」への関心に関する研究
- 3) 協働プラットフォーム形成による六甲山の循環型環境保全システムの構築

### 2. 地域共同研究支援

農学研究科の研究者などが地域と共同でおこなう調査研究のスタートアップや周辺のサポート、学内・国内外への情報発信（セミナー開催、パンフレット等の作成、ウェブ等での公開）のサポートを行っている。

- 1) 人工衛星画像解析を用いた兵庫県内における圃場毎営農状況の自動判別法の開発
- 2) 駆除した外来生物の活用方法に関する研究
- 3) 農山村における地域固有資源の保全とその活用手法の開発



## II 地域交流活動

### 1. 地域連携研究会「A-Launch」の開催

地域での実践活動や農学の先端研究・理論に気軽に幅広く触れる場となることを目指した地域連携研究会を開催している。A-Launch と称した本研究会は、昼休みの時間帯等を利用してランチを食べながら気軽に参加できるトークイベントである。今年度の実施状況は以下のとおりである。

- ・第11回（2015年6月19日）：川西あゆみ（農学研究科地域連携センター 学術研究員）「ドイツの土壌から見る食文化」
- ・第12回（2015年9月29日）：清野未恵子（農学研究科地域連携センター 特命助教）「篠山フィールドステーションを拠点とした地域連携活動の展開と今後の展望」
- ・第13回（2016年1月8日）：高田晋史（農学研究科地域連携センター 学術研究員）「ローカルから社会を変えるー中国から篠山、そして島根へー」



## 2. 学生地域活動サポート事業

農学部・農学研究科の学生の地域での実践活動、研究活動をサポートしている。

2015年度承認した学生活動団体は3団体（ささやまファン倶楽部、にしき恋、サンセット12）で所属学生人数は107名である。また、篠山市で活動をおこなう団体相互の情報共有を図るために組織された「篠山学生活動団体連絡協議会」（篠連）の運営を支援している。定期的なミーティングによる各団体間の情報共有だけでなく、今年度は丹波篠山味まつりへの合同出店に対して事前の計画から当日の運営までを支援した。



学内においては、篠山市で活動する学生団体が農家とともに生産した農作物（黒大豆等）の直売所として「ささやま家（や）」を2013年度より設けており、生産から販売までの過程を経験する機会となっている。販売収益は、交通費等の学生活動団体の活動資金として活用しており、今年度は3回開催した。

なお、「にしき恋」は、農林水産省が主催する「食と農林漁業大学生アワード2015」においてファイナリストに選ばれ、六本木ヒルズで行われた選考会（2015年11月8日開催）においてプレゼンテーションを行った。大賞は逃したものの、高い評価を得た。

## 3. 農村ボランティア活動支援

農村ボランティアバンク KOBÉ「ノラバ」の事務局として、ボランティアを必要とする農家と大学生のマッチングをおこなっている。2015年末の登録者数は468名である。

今年度は、栗やブルーベリーといった果樹農家等の登録があり、募集先や作業のバリエーションが増加した。年間のマッチングは、39件であった。学生と一般をあわせたボランティア参加者は20代が一番多く7名、次いで30代4名である。全体の男女比は



1 : 2 であった。

### III 相談情報発信

#### 1. 農学研究科地域連携センターの相談対応

地域と農学研究科を繋ぐ窓口として、情報の受発信を行い各種相談に応じ、2015年は70件の相談が寄せられた。最も多いのは神戸大学生・大学院生の40件で、その内容はインターンシップや食農コープ教育、および学生地域活動についての質問や相談であった。次いで地域企業7件、さらに行行政6件、大学教員6件、地域団体3件と続いており、幅広く相談を受けている。地域企業および行政からの相談内容は、地域共同研究に関する問い合わせや学生団体への協力依頼等である。

### IV 食農コープ教育プログラム

農学部「食農コープ教育プログラム」の推進主体として、次の3つの地域連携科目を担当教員とともに実施している。なお、実践農学入門との連続性を確保するため、実践農学は、2016年度から2年次開講と変更することとした。

- ①実践農学入門（1年次 通年）
- ②兵庫県農業環境論（2年次 後期）
- ③実践農学（3年次 通年）

#### 2015年度運営体制

##### ■センター長

星信彦（応用動物学 教授）

##### ■副センター長

杵本敏男（農環境生物学 教授）

##### ■運営委員

庄司浩一（生産環境工学 准教授）、中塚雅也（食料環境経済学 准教授）、實安隆興（応用動物学 助教）、黒田慶子（応用植物学 教授）、杵本敏男（農環境生物学 教授）、藍原祥子（応用生命化学 助教）

##### ■地域連携コーディネーター

木原弘恵（特命講師）、豊嶋尚子（学術研究員）、内田圭介（学術研究員）、山野ゆかり（事務補佐員）、清野未恵子（特命助教 ～2015年10月）、川西あゆみ（学術研究員 ～2015年6月）

##### ■アドバイザー

加古敏之（神戸大学 名誉教授）、伊藤一幸（応用植物学 教授）、内平隆之（兵庫県立大学 准教授）

# 神戸大学篠山フィールドステーション 2015年活動報告書

神戸大学篠山フィールドステーションは、神戸大学と篠山市が連携して地域の新しい価値を創造し、問題解決をすすめるための研究教育活動拠点である。学生や研究者が篠山市で活動するための情報収集・研究支援の場、地域と大学のネットワーク再生の場となることを目指している。2015年度は、大きく以下の3つの事業（地域共同研究、地域交流活動、人材育成）を推進した。

## I 地域共同研究

地域共同研究の実施を通じて、地域課題の解決に資する研究をおこなうことを目指した。本年度は以下の地域共同研究を実施し、現場とともに社会実験を進め、他地域へ普及可能な地域課題の解決に資する実地的な知の創造を目指した。

### 平成27年度 地域共同研究

（農学研究科）

- 1) ニホンザルの遊動域と農家の営農実態の変化を通じたサル対策関連施策の評価
- 2) 人工衛星画像解析を用いた兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発
- 3) 駆除した外来生物の活用方法に関する研究
- 4) 丹波木綿の製織技術を活用した新たなプロダクトの開発と技術の資源化
- 5) 複数圃場栽培におけるアズキ粒形質と環境の交互作用
- 6) 農山村における地域固有性の発現とその活用手法に関する研究

（保健学研究科）

- ・篠山市母子保健研修会 ライフステージに応じた支援 ～発達障がいのあるこどもたちとその家族とともに～

（文学部、人文学研究科）

- ・篠山市立中央図書館「地域資料整理サポーター」の活動支援（月1回程度）
- ・神戸大学文学部・大学院人文学研究科「地域歴史遺産保全活用演習」の開講

## II 地域交流活動

大学のもつ専門知を地域課題の解決に活かすこと、また大学における教育や研究の重要性を広く地域住民に理解してもらうことを目指し、地域住民や地元の高校生等を対象とした講演やワークショップ、セミナーやフォーラム等の開催に加え、地域団体や地元高校との共同事業の実施、活動スペースの提供をしている。これら取組みを通じて、地域に開かれた大学の活動拠点として、地域住民と学生、研究者との交流の場となることを目指している。

- 1 フォーラム・セミナー等の企画・開催
  - ・丹波地域大学連携フォーラム
  - ・第10回篠山市・神戸大学地域連携フォーラム
  - ・地域おこし協力隊全国サミット 篠山分科会

- 2 高大連携事業
  - ・農業を通じた高校・大学・地域の連携／篠山東雲高等学校
  - ・地域貢献イベントの企画・実施／篠山鳳鳴高等学校
  - ・地域いきものラボラトリー

- 3 相談業務
 

地域と大学を繋ぐ窓口として、各種相談に対応している。

- 4 活動スペースの提供
 

篠山市全体を生きた現場として教育・研究をおこなう大学関係者に対する活動スペースの提供。



丹波地域大学連携フォーラムのようす



地域いきものラボラトリーのようす

今年度の相談件数およびフィールドステーションの使用状況

	件数	主な相談内容・利用者
相談業務	28件	農業関係、協力隊関連
施設利用	88件	行政職員、地域住民など

### III 人材育成

篠山市全体を生きた現場として教育・研究をおこなう大学の研究者および学生に、フィールドや連携先の紹介、地域課題とのマッチングをおこなう。こうした地域と大学との連携を通じ、地域住民と学生、研究者との交流を促すとともに、地域課題の解決に資する人材の育成を目指している。



実践農学のようす

## 1 教育・演習

### 1) 食農コープ教育プログラムの実施

- ①「実践農学入門」岡野地区
- ②「実践農学」(森づくり班／雑草防除班)

### 2) 授業科目「ボランティアと社会貢献活動」受入れ

## 2 篠山市地域おこし協力隊コーディネート

篠山市と神戸大学は連携協定に基づき、大学生が学業と地域での実践の両立を目指す“半学半域”というスタイルで地域おこし協力隊制度を導入しており、大学で得た専門知を地域での課題解決に活かし実践する人材の育成を目指している。隊員の活動拠点である篠山フィールドステーションでは地域や市との調整をおこなうコーディネーターを配置しており、日々隊員へのアドバイスや活動を進めやすい環境づくりに取り組んでいる。



地域おこし協力隊のメンバー

## 3 学生の地域活動支援

### 1) 学生の自主活動

本年度篠山市内で地域協働活動をおこなっている学生団体。

- ① ささやまファン倶楽部 (真南条上集落)
- ② はたもり (畑地区)
- ③ にしき恋 (西紀南地区)
- ④ サンセット12 (日置地区)

### 2) 留学生の地域交流機会の提供

### 3) 学生の地域研究支援

- ① 放棄地における里草地再生：伝統的管理の再導入実験
- ② 地域における健康学習の可能性と課題  
—兵庫県篠山市を事例に—
- ③ 地域住民の被害防除行動がニホンザルの集落出没頻度に与える影響の空間的分析

### 4) 学生による農産物の加工・販売

- ・山の芋を使った特産品開発プロジェクト (岡野地区、大福堂)
- ・丹波篠山味まつりに出店



学生の自主活動 (サンセット12) のようす



留学生の地域交流機会のようす

## IV 広報活動

### 1) 視察対応

本年度篠山フィールドステーションでは、計7件の活動視察を受け入れている。

カリフォルニア州立大学／丹波市地域おこし協力隊／小野高校国際経済科／長野県松川町役場・松川町地域おこし協力隊／総務省／北海道大学・北海道栗山町役場／京丹波町ケーブルテレビ・京丹波町地域おこし協力隊



視察対応

### 2) 委員参加・講演講師派遣

篠山市まち・ひと・しごと創生総合戦略検討委員会／農都ささやま外来生物対策協議会／篠山市農都創造政策官／兵庫県環境審議会全大会、総合部会環境学習・教育に関する小委員会／篠山市総合計画審議会／篠山市まちづくり審議会／丹波地域大学連携フォーラム実行委員会／丹波の森若者塾事業／篠山市森づくり構想等策定委員会／篠山市日本遺産推進ワーキンググループ委員／地域再生大作戦地域再生プロジェクトチーム委員／加東市まちの拠点づくりアドバイザー／篠山市まち・ひと・しごと創生総合戦略地域活性ワーキングチーム委員／篠山市地域おこし協力隊コーディネーター／丹波篠山ビデオ大賞実行委員会／等

### 3) 情報発信

ホームページやフェイスブックによる情報発信に加え、篠山市の広報誌である「広報篠山」の1コーナーで毎月取組み内容の紹介をおこなっている。

#### 2015年度運営体制

センター長 : 星信彦 (分子形態学教育研究分野 教授)

マネージャー : 中塚雅也 (食糧環境経済学講座 准教授)

特命助教 : 清野未恵子 (現、神戸大学人間発達環境学研究科 助教)

学術研究員 : 高田晋史 (現、島根大学生物資源科学部 助教)、衛藤彬史、板垣順平、眞鍋邦大、辻直美

# 人間発達環境学研究科 発達支援インスティテュート

## 平成27年度 地域連携事業活動報告

人間発達環境学研究科附属発達支援インスティテュートは、社会の多様な問題状況に応じて、人間発達に関する実践的教育・研究を行うとともに、地域との連携を進め、多層・多元的なコミュニティの創成に資することを目的としている。平成27年度は地域連携事業として、インスティテュートに属すヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）及びサイエンスショップを中心に、社会における「人間の発達」を促す多様なアクターの活動を支援する以下のような取組を実施した。

### 1. ESD ボランティア育成プログラム拡張支援（ヒューマン・コミュニティ創成センター）

#### 「ぼらばん」から生まれた三つの動き

「ESD ボランティア塾ぼらばん」（2007年～2011年）および、その後に発展的に再組織化された「ESD ボランティア育成プログラム推進ネット ぼらばん」（2012年～）は、大きく三つの動き（プロジェクト）を生むに至っている。

ひとつは、神戸大学大学院人間発達環境学研究科と教育連携協定を結んでいる「国立ハンセン病療養所 邑久光明園」（岡山県瀬戸内市）を基盤とした「持続可能な島づくりプロジェクト」、二つめは、ヒューマン・コミュニティ創成センターと連携協定を結んでいる「赤崎地区公民館」（岩手県大船渡市）と連携して進められている「大船渡支援プロジェクト」、三つめは、国連大学認証組織：ESD 推進ネットひょうご神戸が実施する「ESD グローカルスタディーツアープログラム」の推進学生チームを育成する「ESD 学び隊活動支援プロジェクト」である。

これら三つのプロジェクトは、それぞれが発展的に動いているだけではない。あざなえる縄のごとく、各プロジェクトの関係者（プロジェクトメンバー）・参加者（高校生・大学生：本学学生を含む）間のつながりを創成し、ESD（持続可能な開発のための教育）のグランドデザインを描く実験的な取組みとなっている。また、発達支援インスティテュートの構成組織である「サイエンスショップ」および今年度新たに発足した「アクティブエイジング研究センター」との連携を生むプラットフォームでもある。

### 持続可能な島づくりプロジェクト 隔離・差別の島から解放の島へ

これまで同様、今年度も、ワークキャンプ・交流活動・プロジェクト創成ワークショップなどの多様な教育・ボランティア活動を実施した。時系列で活動を整理すると、以下のようになる。

- ・春のスタートワークキャンプ  
（5月29日～6月1日）
- ・福島避難家族わくわく保養ツアー  
（7月24日～26日）
- ・邑久光明園納涼祭支援活動（8月5日～7日）
- ・夏のワークキャンプ（8月18日～24日）
- ・秋のプチワークキャンプ（10月23日～25日）
- ・冬プログラム（12月11日～13日）



・春合宿プログラム（2016年3月16日～21日実施予定）

これらの教育・ボランティア企画の立案・実施を通して、社会人・学生・高校生などがESDの実践者として力量を高めただけでなく、兵庫大学・岡山理科大学などの神戸大学外の学生・教員、岡山県内の一般ボランティアとの横のつながりを深めることとなっている。また、プロジェクトの本学の参加者は、すべての学部に及んでおり、汎神戸大学企画でもある。12月の冬プログラムは、本学の『ESD論（教養原論）』の受講者26名を受け入れ、ESDフィールド研究にも協力した。

### 大船渡支援プロジェクト 阪神淡路大震災と東日本大震災 ご縁を紡ぎ続ける活動

「ぼらぼん」主導で実施された「第一回東日本大震災支援ワークキャンプ（2011年4月29日～5月5日）」から丸5年が経とうとしている。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、学生主導の「神戸大学大船渡支援プロジェクト」を一貫して支援し、距離の離れた地域間の連携を促進してきた。

今年度も、これまで通り、学生が「月一訪問隊」として毎月被災地を訪問し、現地のまちづくり組織である「赤崎復興隊」と連携してボランティア活動や交流活動を行ってきた。「消えゆくかもしれないまちの存続を、いかに支援するのか」を問い続けながら、阪神淡路大震災の被災者のおもいと現地のそれとをつなぐような役割を担っている。阪神淡路大震災の被災者からの募金（義援金・現地団体支援金）

を「11えん募金」（毎月11日にJR六甲道駅前で行う。2011年7月～）で受け取り、それを被災地に手渡すと同時に、阪神淡路大震災被災者の声や思いも、仮設住宅の人などに伝える活動をしている。地域と大学・地域間のご縁を紡ぎ続ける地域連携活動ということができる。また、参加学生は全学部に及んでおり、これもまた、汎神戸大学企画のひとつということができよう。



### ESD 学び隊支援プロジェクト 地域の活動ネットワークに魂を注ぐ母体づくり

今年度は、「ぼらぼん」によって2012年まで実施されていた「トリップ・プログラム」をモデルとした「ESD グローカルスタディツアープログラム（通称：ESD ツアープログラム）」が、いよいよ本格実施された。このプログラムの推進組織は、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターを事務局とする「ESD 推進ネットひょうご神戸（RCE 兵庫－神戸）」で、本センターおよび「サイエンスショップ」は、会議やワークショップの開催補助、活動提供団体のコーディネート、活動プログラムの実施補助などについて協力している。

このプログラムは、持続可能な社会づくりに寄与するさまざまな地域団体・NPO・企業の企画するセミナー・シンポジウム・ボランティア活動やインターンシップの場を、高校生・大学生・一般の人たちが自由に行き来し、多様な「旅人（＝他の参加者）」と出会いながら、徐々に関係者のコミュニティが社会的な力になっていくことを狙いとしている。ツアーを自由に作成できるポータルサイト（通称：「ESD ツアープログラム」）を活用し、2015年夏休み以来、のべ300名程度のユース（高校生・大学生）が本プログラムに参加するという実績を残している。本学地域連携推進室の支援事業ではないが、この企画のなかで、行政セクター（兵庫県・神戸市）、民間セクター（企業・NPO）との地域連携は確実に深まりをみせている。

そして、特筆しておきたいのが、このプログラムを実質化する「ESD 学び隊」の組織化である。

「旅人」がさまざまな活動や場面を行き来するためには、ピアサポーターとしてのナビゲーターの存在が求められるが、その機能を十全に発揮するために、ESD に関心のある学生たちと教員たちが協力して「ESD 学び隊」を組織化するに至った。「ESD 学び隊」のメンバーは、自らツアープログラムを活用して多様な活動に参加するとともに、SNS を使用して情報発信して参加者を募り、「旅人」の出会いを演出する。また、3 か月に一度実施される「ESD カフェ」の企画・運営も担う。いわば、「地域連携のコーディネート集団」ということができる。ESD 学び隊は、地域連携に魂を注ぐ存在として発展することが期待される。

今年度を振り返ると、「ぼらぼん」から生まれた三つの動きが明確になり、新たな希望が生まれたと述懐することができる。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究センター 教授 松岡広路)

## 2. 兵庫県における科学を通じたコミュニティ・エンパワーメント（サイエンスショップ）

サイエンスショップは、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じた地域の課題解決や、市民を中心とした科学に関わる諸活動とそれらを通じたコミュニティ活性化への支援等、科学に関わるコミュニティ・エンパワーメントを理念として取組んでいる。平成27年度は地域連携事業として下記のような活動を行った。

### (1) 千種川流域圏の市民環境活動への支援

サイエンスショップは、平成25年度より兵庫県西部の佐用川流域の市民グループ「佐用川のオオサンショウウオを守る会」（以下「守る会」）の環境保全、啓発活動等への協力を行なっている。本年度は新たな取組として、サイエンスショップがコーディネートを行い、佐用川を含む千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による環境モニタリングの取組「千種川一斉水温調査」への、総合地球環境学研究所、および神戸大学人間発達環境学研究科の研究者の参画・協力を開始した。この調査は、同委員会が14年間にわたり継続してきた、河川において生物種の生息の重要な要件の一つとなる夏季の水温等の市民による多地点同時調査であるが、専門家との新たな協働により、同位体分析等、より多くの項目の分析を行う形に発展した。現在、分析結果の取りまとめが行われており、今後、地域へのフィードバックの機会を設ける予定である。



図 千種川一斉調査に向けた事前視察の様子

### (2) 淡路島の市民グループによる科学コミュニケーション活動とコミュニティ活動への支援

淡路島でコミュニティ活性化や人づくり等に取り組む NPO 法人 ソーシャルデザインセンター淡路 (SODA) によるサイエンスカフェの企画・開催に協力した。SODA は、「誰もが役割や仕事を持ち、みんながいきいきと笑顔で暮らせる」社会づくりを理念として掲げ、科学コミュニケーション等の活動も地域活性化の取組の一環として位置づけている。平成27年12月には、神戸大学理学研究科の研究者をゲストとして同年のノーベル物理学賞に関する話題を取り上げたサイエンスカフェが南あ

わじ市の吉備国際大学志知キャンパスにおいて開催された。また、平成28年1月には、SODAからの提案に基づき、利他的行動に関して、生態学、環境工学等の研究者をゲストに招き多角的に語り合うサイエンスカフェを共同開催した。

**(3) 伊丹市、姫路市等の市民グループによる科学コミュニケーション活動、科学教育活動への支援**

伊丹市でサイエンスカフェの企画・開催等に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」の活動を継続的に支援するとともに、同グループからの提案を受けた新たな試みとして、幼児・児童とその保護者を対象として、数学教育をテーマとしたサイエンスカフェを開催した。

この他、姫路市を中心とした播磨地域で科学コミュニケーションに取り組む市民グループ「サイエンスカフェはりま」のサイエンスカフェ開催の取組を継続的に支援した。また、阪急阪神ホールディングスグループが西宮市の大型商業施設西宮ガーデンズ内に開設した「沿線コミュニティベーススタジモにしのみや」を利用して市民グループが新たに立ち上げる「サイエンスカフェStajimoにしのみや」の企画・検討と、試行として開催したサイエンスカフェ「宇宙と科学について語ろう！～スター・ウォーズより～」に協力した。

(サイエンスショップ副室長 伊藤真之)

表 市民グループによる開催を支援したサイエンスカフェの例

テーマ	開催日	(開催地)
＜サイエンスカフェ伊丹＞		
微生物が食べる？ 作る！？ プラスティック	平成27年6月	(伊丹市)
地球深部探査船「ちきゅう」って？～地震を深く知るサイエンス～	平成27年7月	(伊丹市)
イモムシ・ケムシの護身術	平成27年9月	(伊丹市)
薬か毒か 麻薬が人類にもたらしたもの	平成27年10月	(伊丹市)
大人のためのやりなおし数学塾～関数編～	平成27年10月	(伊丹市)
染色体で何がわかる？	平成27年11月	(伊丹市)
＜サイエンスカフェはりま＞		
ブルキナファソの隕石と音楽	平成27年5月	(姫路市)
西アフリカの伝統音楽	平成27年7月	(姫路市)
今夜はテラキン曜日 宇宙開発表舞台と裏舞台	平成27年8月	(姫路市)
サイエンスツアー 巨大顕微鏡 Spring-8って何？	平成27年8月	(佐用郡)
星の使者～朗読構成劇と天文学者のお話～	平成27年12月	(姫路市)
＜サイエンスカフェ * SODA ＞		
「ニュートリノ」のはなし～2015年ノーベル物理学賞をめぐる～	平成27年12月	(南あわじ市)
人はなぜ人を助けるのか～一人の心？ 社会のルール？ 宇宙の真理？～	平成28年8月	(南あわじ市)

## **第II章**

# **学内公募事業活動報告**

# 「映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携」

国際文化学研究科 准教授 板倉 史明

## 本事業の目的：

本事業は、平成25年度以降、神戸大学大学院国際文化学研究科と兵庫県唯一の映像メディア・アーカイブである神戸映画資料館（長田区）が連携し、映像メディア・アーカイブの映像および資料を活用することによって、神戸という地域に根ざした映像文化の育成と情報発信を行なうことを目的とする。そのことを通じて、本学における今後の映像メディアを用いた教育研究活動と地域連携の基盤を生み出すことが可能となる。

## 成果報告：

### （1）神戸映画史の開拓と調査

イベント「第7回神戸ドキュメンタリー映画祭 ホームムービーの日 in 神戸」（於：神戸市地域人材支援センター、2015年10月17日（土）13：30～15：30）において、板倉が「映画館のある風景」と題して、神戸有数の興行街であった新開地と映画との関係について解説した。その際、神戸アーカイブ写真館が所蔵する新開地の写真を活用して連携を深めた（写真1）。

昨年度に引き続き、『神戸又新日報』のデジタル資料を活用した神戸映画史の資料調査を実施した。その成果を、現在『神戸新聞』に連載中の「キネマコウベ」（執筆は文化部田中真治記者）へ情報協力するという形で、神戸の映画史の開拓に貢献した。



写真1：「ホームムービーの日 in 神戸」（於：神戸市地域人材支援センター）において、板倉が「映画館のある風景」と題して、新開地と映画との関係について解説した。

### （2）資料整理（アマチュア映画の整理と教育研究活用）

昨年度に引き続き、神戸映画資料館の資料のうち、とくに戦前のアマチュア映画フィルムの調査を実施した。特に戦前に撮影された9.5mmフィルムや16mmのコダカラーフィルムについては、1930年代の神戸や大阪の映像も含まれており、今後の教育と研究への活用が期待できる。その成果の一部は、日本映像学会第41回全国大会（京都造形芸術大学、5月31日）において、「1930年代におけるアマチュア映画文化と色彩」として発表した。また1930年代の関西のアマチュア映画作家である大石順一郎のフィルムをデジタル化し、3月に実施予定の公開研究会において上映するとともに、内容に関する調査と分析を公開する。

また、大学教育とアーカイブの連携事業として、7月29日に国際文化学部 5 名を演習授業の「学外実習」として神戸映画資料館に引率し、資料館の役割に関する講義を受けたほか、映画チラシの整理作業を体験してもらった（写真 2）。



写真 2：大学教育とアーカイブの連携事業として、学部生 5 名を「学外実習」として神戸映画資料館の映画チラシ整理に参加した

### （3）神戸関連のフィルム調査に協力。

神戸ドキュメンタリー映画祭実行委員会（委員長：向恵子 [神戸市立地域人材支援センター事務局長]）は、神戸市から「まちの再生・活性化に寄与する文化芸術創造支援」の助成を受け（2013年10月～現在まで継続）、神戸関連の映画フィルムの発掘と調査を行った。そのなかで、7月に東灘区の個人からの依頼で、1931年に撮影された家庭用9.5mmフィルムの調査を実施した。また、神戸が舞台となった映画作品や神戸でロケ撮影された映画を網羅的に集めるプロジェクト「神戸の映画」大探索にも協力した（リストは映画祭 HP にて公開中：<http://kobe-eiga.net/kdff/>）。

### （4）テレビおよび新聞メディアへの取材協力

関西テレビの依頼で、戦前の9.5mmフィルムの調査に協力し、報道番組「ゆうがた LIVE ワンダー」（2015年6月11日（木）17：00～19：00放送）のなかで、発見された映画フィルムの歴史的価値についてコメントした。

さらに、神戸映画資料館のアマチュア映画の調査のなかで、1933年にサンフランシスコで松岡洋右が演説したときのカラーフィルムが発見された。そのことが『朝日新聞』（2015年11月20日夕刊）と、共同通信社によって『北日本新聞』（12月21日朝刊）など数紙で記事にされた際、そのフィルムの内容について板倉が調査を行い、それぞれコメントが記事に掲載された。

### （5）シンポジウムの開催

2016年3月26日と27日に、本事業の主催による地域映像のアーカイビングとアマチュア映画に関連する研究シンポジウムを神戸映画資料館において開催し、一年間の調査成果を公開した。東海大、新潟大、福岡市総合図書館で実践されている地域の映像アーカイブ関係者を招聘し、神戸における3年間の活動実践を相対化し、さらに展開させるための議論を行なった。

### （6）今後の課題

今後はこれまでのフィルムや資料の調査結果を踏まえて、神戸と映画の歴史を形としてまとめる必要がある。また日本に数えるほどしか存在しないフィルム・アーカイブでの教育的な実習活動は今後さらに展開させていきたい。

# 兵庫県における「地域創生」－ASABAN プロジェクトの普及－

経済学研究科 藤岡 秀英

多可町八千代区中野間集落から取り組み始めた ASABAN プロジェクトは、今年度で丸 3 年継続し、着実に具体的成果を生み出しています。参加集落、農家からの問い合わせも徐々に増え、2016年度の作付面積もこれまでの 2 倍以上に広がります。

そして、今年度は、藤岡ゼミ、羽森ゼミ、「学生流むらづくりプロジェクト『木の家』」と藤岡ゼミ卒業生が多数参加しました。

## 1. ASABAN プロジェクト＝（亜）麻＋播（州）

### （1）「亜麻の栽培」による遊休農地の活用

「稲作」と「亜麻」（リネン）の二毛作で土壤改良

### （2）播州織の新素材としての亜麻（リネン）

「播州織」の技術を生かした新商品開発、製造

- ・播州織の新素材「リネン」

タオル、靴下、ストール、ハンカチ、ショール、ブラウス、シャツ等

「多彩な織物」の製造販売：「門脇織物株式会社」

### （3）「地域ぐるみの 6 次産業化への挑戦」

- ・亜麻の種を使ったケーキ、パンの製造販売：「亜麻の栽培を考える会」

①「亜麻の種」食品加工 パン、ケーキの製造販売

②亜麻農地で「山田錦」を栽培し、純米原酒に加工してもらって販売中

純米原酒「亜麻の酒」販売中

③「亜麻仁オイル」の製造・販売（2016年度の課題）

## 2. 地域連携を通じた「大学教育の実践」

### 1. 農業体験から 6 次産業化への取り組み体験

亜麻の栽培、収穫から織物への加工を体験

「山田錦」「キヌムスメ」の稲作体験

### 2. 地域住民との共同作業を通じた体験学習

5 月亜麻の花祭、6 月亜麻の収穫と田植え

10 月稲刈り、11 月脱穀、12 月餅つき

### 3. 「6 次産業化」と「地域創生事業」の研究活動

修士論文、卒業研究テーマとして取り組む

## 3. 「地域連携の継続性」の意義

大学の地域連携が教育・研究活動に重要な成果をもたらすことはすでに実証されています。同時に、中山間地域にとっても、「若者」との交流とそのエネルギーを提供されることで、さまざまな事業に弾みがついて、「地域創生」への可能性を開く契機となることも確かめられました。

「地域連携事業の継続性」は、ASABAN プロジェクトのような「6 次産業化」を目指すプロジェクトに大変有効です。「継続は力」という言葉が示すように、これまでの卒業生もまた友人、家族と共にその地域を訪問して集落の人びととの交流を拡大、継続することにつながっています。今年度も数十名の卒業生が ASABAN プロジェクトや「学生流むらづくりプロジェクト『木の家』」のイベントに参加し、作業を手伝い、地域住民との再会を楽しみ、商品の購入や「学生活動への寄付」



を提供してくれています。

そして、兵庫県地域振興課による「地域創生事業」としての支援、神戸大学の連携推進課産学官連携グループからの助成も大きな貢献につながっています。これらの資金提供によって、学生を兵庫県の中山間地域へ送迎する費用を賄い、さまざまな活動に使うパソコンや道具類の購入ができています。

#### 4. 「6次産業化」による地域連携事業の課題

「地域創生事業」は、新たな経済活動を生み出し「雇用」を拡大し、U・I・Jターンによる若い世代の人口増加を目的とします。そのためには、地域の自然環境、地場産業、既存の事業者がもつ技術と設備を有効に活用するアイデアを生み出さねばなりません。したがって、最初の段階で、地域経済社会の歴史・文化をはじめとする「調査活動」が前提となります。

第2に、調査活動のプロセスの中で、私たちと地域住民との間の「視界の相互性」を確立することが課題です。私たちの目的は「大学生・大学院生の教育・研究活動」に資することです。学生ボランティアの「労働力」を提供するのではなく、あくまで「教育と研究活動」が大学の目的なのです。地域社会の課題を把握しながら、地域住民には大学の目的を理解していただくことが前提となります。

第3に、これらの準備過程を通じて、「目標と計画」ができること、地域住民との合意形成、地域連携事業のルールが必要となります。

【上記に関する学会報告】「地域活性学会」第7回研究大会

2015年9月6日 会場：大手前大学

論題「地域活性化の理論と大学教育を通じた実践」

(報告者：藤岡 秀英)

#### 5. 今後の課題

##### (1) 亜麻の栽培方法

無肥料・無農薬が前提となるため栽培普及には除草作業の課題があります。収穫は「手作業」となり、現在まで学生参加者の協力を得ることで継続していますが、参加農家が増えると亜麻の収穫機械を導入する必要があります。しかし、農地が分散しているために、高額の機械を購入したとしても、その移動・搬送の問題が生じるでしょう。

##### (2) 「6次産業化」＝加工販売・宣伝方法

ASABANプロジェクトでは、地場産業としての「播州織の技術と設備」を活用しています。亜麻の収穫、稲作には、これまで神大生の助力が大きな貢献につながっていますが、今後、亜麻の種の「脱穀」、亜麻繊維の「紡績」、亜麻仁油の「搾油設備」など、それぞれの加工過程に設備投資が必要です。

また、インターネット広告、ホームページ（ASABANで検索）による宣伝、東急ハンズ三宮店、神戸市内のホテルでの展示販売も行っています。さらに、知名度を高める努力と工夫の検討が必要です。

##### (3) 大学との連携に関わる事務作業

兵庫県下の複数の地域からの問い合わせ、連携協力の相談と希望が寄せられてきます。しかし、現在すでに1人の教員（藤岡だけ）では対応が不可能な状況にあります。



# 兵庫県喘息死ゼロ作戦

医学部附属病院・特命教授 西村 善博

## はじめに

平成22年に「兵庫県喘息死ゼロ作戦」を設立し、兵庫県全体として質の高い喘息治療の普及を目指し兵庫県、県医師会、県薬剤師会、県病院薬剤師会とともに活動中である。これまでに兵庫県が抱える気管支喘息治療の課題である①長期管理の重要性の啓発、②吸入ステロイド薬の普及、③高齢者喘息治療への対応、④喘息治療を取り巻く医療協力体制の確立について、検討を加えてきた。

## 平成27年度の取り組み

平成27年度は、これまでの活動を継続するとともに、二次医療圏ごとの取り組みを実施した。ここでは、救急医療を受けた喘息患者のその後の対応について調査を行ったので、その概要を示す。

＜喘息発作による救急外来受診後の再受診状況の現状と課題＞

(兵庫県医師会雑誌 第58巻第1号 44-49ページ 平成27年9月30日発行より)

喘息死を防ぐためには、発作後の継続治療が重要である。救急受診後の継続治療の実態を明らかにするため、姫路市休日・夜間急病センターを受診した喘息患者887名を対象に調査を行った。受診し治療を受けた対象者に報告葉書(図1)と喘息資料(図2)を渡し、当日以降に医療機関を受診するよう促した。後日医療機関を受診(以下「再受診」)した際、受診日と処方内容を担当医より葉書にて報告して頂いた。その結果を基に救急医療受診後の喘息治療の実態を検討した。

**喘息発作 再受診報告**

年 月 日 救急外来受診  
・ (イニシャル) (男・女) 才

年 月 日に受診されました。

【治療薬】(処方された薬剤をチェックして下さい)

吸入ステロイド薬

吸入ステロイド/長時間作用性β2刺激薬・配合薬

長時間作用性β2刺激薬

ロイコトリエン受容体拮抗薬

テオフィリン徐放製剤

短時間作用型気管支拡張薬

その他( )

医療機関名 \_\_\_\_\_

医師名 \_\_\_\_\_

ご意見記入欄 \_\_\_\_\_

NO. \_\_\_\_\_ 兵庫県喘息死ゼロ作戦

図1 報告葉書

**喘息で受診された患者さんへ①** 兵庫県喘息死ゼロ作戦

ぜんそく  
喘息とはどんな病気??

喘息とは、胸ごよみに息をすることが難しくなる病気です。明け方や夜中に症状の強められることが多く、ヒューヒューやゼーゼーといった箱の鳴るような呼吸音(喘鳴)が特徴的で、著しい咳や息苦しさを伴う疾患です。

**慢性の気道炎症が問題です!!!**

喘息は発作のときだけ気管支の収縮が起こる病気と考えられてきました。しかし研究が進み、気管支喘息は慢性的に(症状が見られないときでも)気管支に炎症が生じている疾患であることが分かってきました。

**喘息による死亡者数の推移**

1980年以降、喘息による死亡者数は減少傾向にあります。これは、喘息を抑える治療により喘息をコントロールでき、十分な治療を受けておられない喘息患者さんは、慢性の気管支炎によって徐々に気管支が弾力性を失い、慢性不安定になったり、上部のように結核や気管支炎等を起こした状態になったりします。狭窄した気管支に粘度の高い痰が溜まる、あるいは高度な発作による「喘息による死」は今もなお無くなってはいません。

→ロメド：炎症とは何らかの有毒な刺激を受けた時に起こる防御反応の一つです。けがをするとかゆいのが赤く腫れるのは炎症の一例です。気管支喘息ではアレルギーなどにより気道に炎症があるので、治療としては「炎症」を抑えるのがとても重要です。

兵庫県喘息死ゼロ作戦実行委員会  
http://www.med.kobe-u.ac.jp/asthma/index.html

図2 喘息資料

**喘息で受診された患者さんへ②** 兵庫県喘息死ゼロ作戦

**喘息の治療法**

1) 喘息発作の誘因となるものを避けましょう

(1) 抗原(アレルギー:アレルギーを引き起こす原因物質)からの回避  
風通しによる乾燥の予防除菌や布団、絨毯などの掃除。花粉飛散の時期には花粉の吸入にも注意。  
(2) ウイルス感染防止  
風邪やインフルエンザなどのウイルス感染は、喘息の悪化を誘発します。手洗いやうがいの励行を。  
(3) タバコ  
禁煙しましょう。禁煙が難しい方は、専門医の指導のもとに禁煙してください。

2) 薬物によるコントロール

(1) 副腎皮質ステロイド  
現在の喘息治療において最も効果的な薬です。喘息治療の基本となる吸入薬です。喘息発作を減少させることが期待されています。

(2) 長時間作用型気管支拡張薬  
症状コントロールに有効ですが、喘息に対してこれらのみの使用は禁じられています。

(3) (1)と(2)の配合薬  
2種類の吸入薬を同時に吸入できますので、吸入手続の手軽さが期待できます。

(4) ロイコトリエン拮抗薬  
気管支拡張薬と気管支収縮作用を有する薬です。アレルギー性喘息や慢性気管支炎、アスピリン喘息に有効な場合があります。

(5) 徐放性テオフィリン  
舌から用いられている薬剤です。これらのみの長期使用はやめましょう。

3) 発作の治療

(1) 短時間作用型気管支拡張薬  
発作時に使用します。このための長期使用はやめましょう。

(2) 経口(注射用)ステロイド薬  
重症発作時に用います。十分量を用いて早期に症状改善を行います。短期間のみ使用するが原則です。

兵庫県喘息死ゼロ作戦実行委員会ではホームページを作成しております。是非そちらもご覧ください。  
http://www.med.kobe-u.ac.jp/asthma/index.html

### 【結果のまとめ】(図3)

- ・約半数の葉書が返信され、少なくとも半数の患者が救急受診後再受診していたことが明らかとなった。
- ・大半の患者が3日以内に再受診していた。
- ・再受診時、抗ロイコトリエン剤(49.1%)、吸入ステロイド(24.7%)、吸入ステロイド配合剤(17.8%)、テオフィリン製剤(13.1%)が処方されていた。
- ・再受診時、気管支拡張薬のみの処方(不適切な処方の可能性あり)は33%に見られた。
- ・複数回救急受診者全体の19.2%が再受診をせず、再受診しても毎回受診先が異なるものが殆どであった。

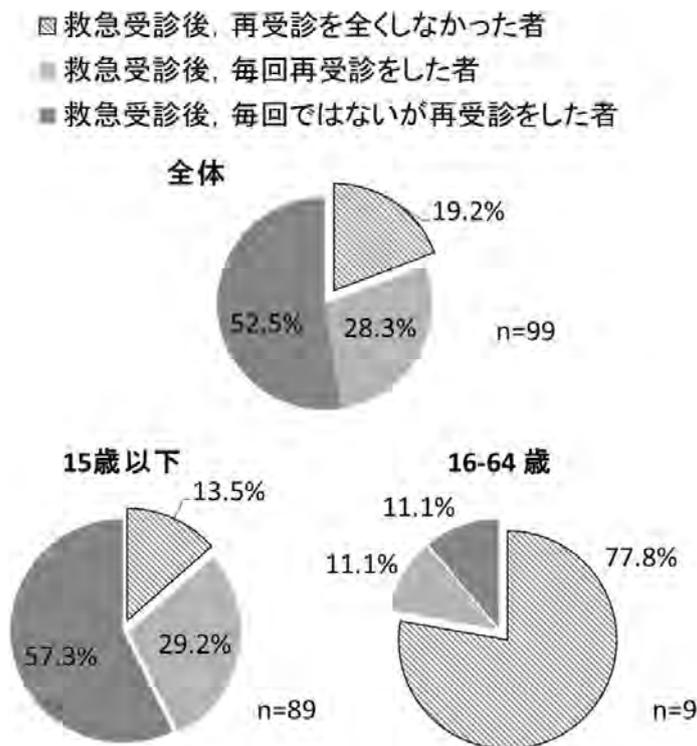


図3 再受診結果

本検討から、約半数が救急受診後に再受診し、吸入ステロイドを含む治療を受けていたが、複数回救急受診者において、救急受診後の再受診が不十分であることが明らかとなった。

### <その他の活動>

平成27年度より、薬剤師への啓発活動から見つかった農作物収穫との関連性のある喘息症状については、その原因追及、予防対策を検討するべく、事業計画し、倫理委員会に申請し、プロジェクトを展開する準備を整えた。

また、兵庫県の協力により薬局に対する2回目の喘息給料方に関するアンケート調査を予定しており、年度内に結果を収集する予定となっている。

# 鶴甲団地再生・活用プロジェクト

工学研究科建築学専攻 教授 三輪 康一・助教 栗山 尚子

## 1. 事業概要

神戸市では1960年代から住宅団地を開発してきたが、それら初期の開発団地は時間の経過とともに、居住者の高齢化や施設の老朽化などにより、次第に活力を失いつつある。一方、計画的につくられたこうしたニュータウンのインフラや上モノなどの資源を有効に活用することは、団地自身の活性化とともに、近隣地域や周辺の公的施設の活用にとっても極めて有用である。そこで神戸大学大学院工学研究科と一般財団法人神戸すまいまちづくり公社が連携して、神戸大学に近接する鶴甲団地の活性化のために、地域社会にとって、また神戸大学の研究や教育にとって、団地のストックを有効に活用する方策（団地の再生、空き家住宅の活用の促進）を検討し、実施することを目的として、本事業を実施した。事業の内容は主に以下の2つである。

### （1）空き家住宅の活用に向けた取り組み

- ・学生によるリノベーションプランの作成と発信。
- ・学生向けシェアハウスの実現に向けた取り組み。（シェアハウスのニーズ把握、実験的DIYの取り組み）

### （2）鶴甲団地の魅力発見・発信の取り組み。

- ・魅力発見：団地魅力資源調査と居住者へのヒアリング調査による団地ライフスタイルの再発見
- ・魅力発信：鶴甲魅力発見冊子の発行。

本事業を円滑に進めるために、神戸すまいまちづくり公社と神戸大学大学院工学研究科間での連携協定を2015年6月に締結した。

空き家住宅の活用に向けた取り組みと、鶴甲団地の魅力発見・発信の取り組みを順に報告する。

## 2. 空き家住宅の活用に向けた取り組み

三輪研究室では昨年度より鶴甲団地の再生・活用に関する活動に取り組んでいる。昨年度は三輪研究室学生が、居住者タイプ（単身・ファミリー・シェア、職業など）と部屋の広さ（1戸、2戸、4戸）の組み合わせでプランタイプを設定し、鶴甲団地の住戸のリノベーションのプラン案を7つ作成した。このプラン案は、2015年2月8日に開催された公社主催の鶴甲団地モデルプラン公開イベントで展示された。さらに、公社が2016年1月に発行した『つるかぶと団地リノベーションブック』にも掲載された。

また、学生向けシェアハウスの実現に向けた取り組みとして、シェアハウスのニーズ把握と実験的DIYの取り組みを実施した。シェアハウスのニーズ把握のために、建築学科学生へのアンケート調査を2014年度に実施し、鶴甲団地への居留意向とシェアハウスの居留意向が確認できた。今後は、鶴甲団地が居住地の選択肢に入るようにするための効果的な広報や、交通の便が悪い、コンビニがなく不便といったマイナスのイメージを改善するような、鶴甲団地の魅力を伝える効果的な方法が必要となる。

また、鶴甲団地での学生の居住の可能性を探るため、2回のワークショップを実施した。2015年7月31日に、第1回目ワークショップを開催し、「学生の鶴甲団地での住まい方とシェアハウスの

意向」についてのグループワークを行なった（写真1）。鶴甲のよさとして、大学の近さ、自然豊かな環境、住環境のよさを、学生は高く評価しており、コンビニや飲食店の少なさを生活するには不便な点だと認識していることが明らかとなった。また、お祭りや地域活動への参加といった、居住以外の方法で鶴甲団地と関わりを持つ可能性についても意見が出された。第2回目は2015年10月2日に開催され、公社の公募で採択された事業者のリノベーションプランの提案について、学生の意見収集がなされた。事業者提案は、隣接する2戸の外部にウッドテラスを設置し一体として利用できるシェアハウスの提案である。この提案について、ウッドテラスや内部の共有空間の使い方や、居住者がシェアライフを楽しむための管理運営の方法について、議論がなされた。ワークショップを通して、シェアハウスでの居住に興味がある学生が住まうことによって、鶴甲団地に活気生まれる可能性を見出すことができた。



写真1. 第1回WSの様子

2015年10月下旬～1月にかけて、事業者の提案の実現のための工事のDIYに計4回参加した（写真2）。解体工事、ウッドデッキの塗装と組み立て工事、タイル張り、建具の塗装、家具の組み立て等に、建築学科1回生～大学院生や他学科の学生の有志が参加した。DIY参加者アンケートより、鶴甲団地への興味の高まりを確認することができた。



写真2. ウッドデッキの塗装

### 3. 鶴甲団地の魅力発見・発信の取り組み

2015年5月に実施したフィールド調査では、鶴甲団地の豊かな自然（山の緑、桜の木の多さ）、海への眺望と山への眺望のよさを把握し、6月～8月にかけては30名の居住者へのヒアリング調査を実施し、鶴甲団地での生活の実態や住み心地について分析を行った。フィールド調査と居住者へのヒアリング調査の結果を総合し、鶴甲団地の魅力は、（1）自然が豊かで眺望が良い、（2）子育て環境が良い、（3）交通の便が良い、（4）近隣住民との交流があるという4点に集約された。

これらの調査の結果を盛り込んだ、鶴甲団地の魅力発信冊子『標高300m 鶴甲の暮らし』を編集・執筆し、2016年1月23日に発行した（写真3）。本冊子は、鶴甲の概要・アクセス、鶴甲エリアマップ、四季折々の鶴甲の風景、子育て情報、コミュニティ活動、リノベーション紹介、眺望を楽しみながら散歩する団地内ウォーキングマップの提案の計14ページで構成され、婦人会の協力により、鶴甲地区内全戸に配布された。以上の調査の実施や冊子で使用する写真の提供において、鶴甲ふれあいのまちづくり協議会、鶴甲地区連合自治会、神戸大学大学院人間発達環境学研究科の岡田修一教授、住民の皆様にご多大なご協力をいただいた。

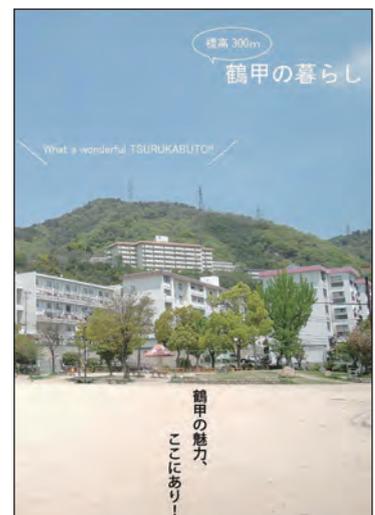


写真3. 鶴甲団地魅力発信冊子・表紙

現在は、魅力発信冊子の配布と、事業者提案のリノベーションプランの施工が終わったところである。今後は魅力発信冊子の住民の皆様からの反応等をふまえ、神戸すまいまちづくり公社とさらに連携を深めながら、魅力発信冊子の活用方法や、鶴甲団地への若年世帯の移住・定住策について検討を重ねる予定である。

# 震災タイムスリップウォークを通じた多世代災害語り継ぎ活動

工学研究科 准教授 近藤 民代

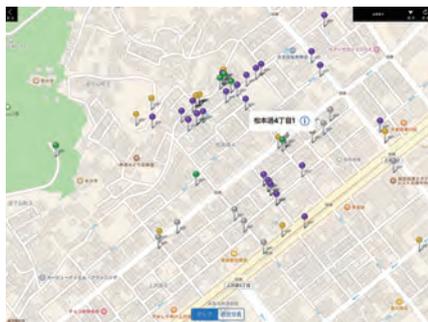
## 概要

本事業は、阪神・淡路大震災から21年目を迎え、震災を知る世代の高齢化、震災を知らない世代の成長により、被災地から震災の記憶が風化しないようにするための語り継ぎ活動です。この活動の特徴は電子端末機器に対応したアプリを用いるところにあります。震災直後また復興の過程が記録された写真やビデオをiOS対応アプリ「メモリアル1.17」の中にコンテンツとして入れ、iPadを用いて、記録が行われた緯度・経度・方向に立ち、現在のまちの当時の様子を写真やビデオを通して、震災を知らない世代が震災を疑似体験します。また活動には神戸大学近藤研究室、神戸市企画調整局情報化推進部、岩手釜石・大槌復興カメラ、兵庫県立神港高校、人と防災未来センターが参加をしています。

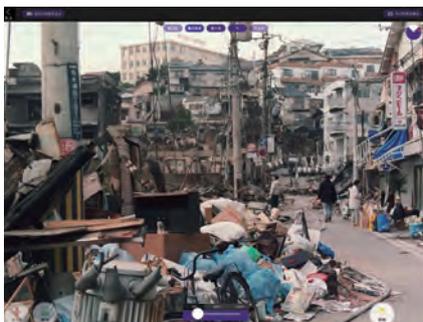
## 震災の記録の一元化と活用

神戸大学生は高校生を交えたまち歩きの前準備段階として震災記録を撮影者や企画調整局情報化推進部、神戸大学附属図書館震災文庫から協力を得て収集し、4月と11月の2度、実際の場所でのフィールドワークで現在のまちの様子と震災前の地図を写真やビデオと照らし合わせながら撮影場所の特定を進めました。

神戸大学生はまち歩きで住宅地図にメモしたことを基に電子データを作成し、散在していた記録をアプリ内で一元化しました。これにより地点データ（緯度・経度・方角）がすべてのコンテンツに加えられ、震災をよりリアルに伝えるためのツールに改変することができました。



アプリ内の地図・ピンが撮影場所



アプリ内に記録された震災直後の画像（1995.01.19撮影）



高校生とのまち歩きで撮影した写真（2015.12.04撮影）

## 神戸震災タイムスリップウォーク

今年度の「震災タイムスリップウォーク」では、神戸市兵庫区松本地区を対象にして写真や動画の残っている40箇所以上の地点を神港高校から3年生8名と教員1名が参加し、疑似体験をしながら現在の記録を行いました。松本地区自治会の方やコンテンツの写真並びに動画の撮影者から震災時の様子や復興の過程について話を聞くとともに、現地の撮影地に実際に立ちアプリの中の写真や動画を見ることで高校生が現在の風景と過去の記憶を結びつけることができました。また高校生はアプリという馴染みのあるツールを使うことで、自主的に地点を探して、過去の動画や画像に触れ

る場面もあり、若い世代の知りたいという好奇心をうまく引き出す役割をしていました。

岩手県から2011年の東日本大震災の被災地を震災直後から記録し、アーカイブ化及び写真を媒介とした震災伝承活動「復興カメラ」を行っている NPO @リアスの方も参加して災害伝承の未来姿である神戸を見てもらうとともに、伝承活動に関して助言を仰ぎました。



アプリを用いて過去の動画を見る

## 海外の学生への災害伝承

### <インドネシアの学生とのまち歩き>

2015年10月2日にディポネーゴロ大学建築学科の学生26名、教員2名との松本地区町歩きでもアプリを使って、神戸大学生が松本地区を案内しました。事前に英語版の地図を作り、事前学習として、阪神淡路大震災と松本のまちづくり協議会に関するレクチャーを私たち学生だけで準備をして行いました。まだ火事の様子映像や建物が崩れている写真を現地で見て、震災や復興を疑似体験することは、言葉を超えて阪神淡路大震災を伝えることができるとわかりました。



動画を真剣に見るインドネシアの学生

### <アメリカの学生とのまち歩き>

2016年1月12日にアメリカのイリノイ工科大学の学生14名と教員家族3名の日本研修のガイドの一環として、私たちはアプリを用いた松本まち歩きを“Back to the Hanshin-Awaji Great Earthquake”と題して行いました。人と防災未来センターの上級研究員で且つ撮影者であった方にも参加していただきましたが、神戸大学生は今年度3度目であったこともあり自分たちで阪神淡路大震災について学んだことをアプリのコンテンツを利用しながら外国の学生に説明を行いました。また地図や説明、経路も前回のインドネシアの学生を案内した時から改善することもできました。これは、実際に震災を体験していない学生が、ツアーを通して災害伝承が行われ、それを次の世代や海外の方への伝承を行っているということです。



公園の災害用設備を説明する大学生

## 総括と今後の展望

今回の活動は、神港高校の1校でありましたが、今後は阪神淡路大震災の記録や記憶として写真や動画、語り部の残っている地域の他の高校や中学の生徒にも活動を広げ、若い世代へ震災の恐ろしさや教訓などを語り継ぐことと共に、記録を作っていくことに取り組んでいく予定です。また、これは阪神・淡路大震災にだけに留まらず、2004年の中越地震や2011年の東日本大震災、2014年の広島の高雨土砂災害などにも災害伝承の一つの形として使うことができます。

神戸大学の学生がこの活動に参加する意義として、阪神・淡路大震災に関して多く学ぶ機会に恵まれているからといって学問的な知識を得るだけで満足するのではなく、現地に赴き講義の中では聞けなかった話や実際の様子などを知り、それらを総合的に解釈しアウトプットしていくことにあると思います。(文責：工学研究科博士前期過程 山本舜一)

# 神戸大学都市安全研究センター発

## “みんなで考えよう 安全・安心で快適なまちづくり”

都市安全研究センター 北後 明彦

### 1. はじめに

今年も例年に続き、2015年4月25日のネパールにおける大地震、9月9～10日にかけての関東・東北豪雨による鬼怒川の決壊と洪水被害、また9月17日のチリ中部沖を震源とする地震と津波など大きな災害が報告されている。あらゆる災害への対応が求められている中で、安全安心な社会の構築を目指して調査・研究活動を行っている都市安全研究センターは、その知見を広く市民の方々に適切な形で還元する責務を負っている。

都市安全研究センターでは、市民の都市防災・減災意識の向上を目指して、平成13年度からオープンセンターを実施してきた。地元自治体が行なっている安全安心に係わる活動や都市安全研究センターの諸活動について見・聞・触型イベントとして紹介することによって、地域住民の減災・防災意識や研究センターに対する親近感の向上を図りたいと考えている。“環境保全・改善もふくめた広義の意味での安全で安心できる快適空間としての都市のあるべき姿”について、大人から子供まで一緒に考えてもらえるような時間を提供できればと願う。

### 2. 開催概要

日時：平成27年10月31日（土）11：00～17：00	共 催：神戸市
会場：神戸ハーバーランド デュオこうべ	来訪者数：約300名

内容は、ステージ上での表彰式／耐震化PR／ミニ講習会／ミニ教室及びフロアでのブース形式のパネル展示と実験・体験コーナーである。

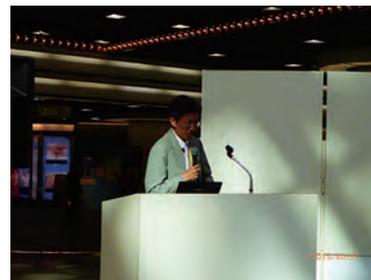
まず、都市安全研究センター長から開催挨拶を行い、都市安全研究センターの組織や活動の紹介と、オープンセンターの趣旨について説明を行った。

次に、ステージでは神戸市住宅都市局による「防災啓発ポスター」の「すまいの耐震化賞」表彰式が行われた。同局建築指導部耐震推進課推進担当係長平山知明氏より「防災啓発ポスター」についての説明と今回受賞された3名の方の紹介および受賞作品の講評がなされた。引き続き、当日会場に来ていただいた方に同局建築指導部長の浜田有司氏より表彰状が授与された。その後、神戸市住宅都市局建築指導部耐震推進課長 矢島利久氏によるミニ講演会“すまいの耐震化PR「地震に自信ありますか？」”が行われた。阪神大震災当時の被害状況について自身の経験とともに説明された。また、三木のE-defenseで行われた実物大実験の様子も交えながら住宅内での家具の固定や住宅の耐震化工事の効果などについて話をされた。実際に、家具が倒れてきてマネキンが下敷きになる様子や、耐震化未施工住宅が完全に倒壊する様子を撮影した動画は観衆には衝撃的で、地震への備えの重要性を



確認させられた。市が行っている耐震化支援制度についても丁寧に説明して頂いた。

午後からは、神戸市消防局のボランティアグループ「チーム：TEC 安<sup>2</sup>」による“あなたの勇気が命を救う～AEDと心肺蘇生法を体験しよう～”と題したミニ講習会が行われた。実際に心肺蘇生が必要な現場に遭遇した場合の手順について、寸劇風の実演に加えて、泰地英雄代表が丁寧な説明を加えており、分かりやすい内容で、心肺蘇生法がより身近なものとなった。



講演の様子

また、ミニ教室として、都市安全研究センター長尾 毅教授による“場所毎に違う地震の揺れを評価するには”を開催した。普段の生活では気にすることも少ない地下深くの地盤の堆積環境によって、地震が起こったときの地面の揺れが大きく異なること、場所ごとの揺れ方を地震が起こる前に推定する方法の研究が進められていることなどが説明された。会場からの質問もあり、防災・減災につながる具体案として、参加者も熱心に講演に耳を傾けている様子が伺えた。

並行して、会場では様々な実演・体験コーナーが設けられ、神戸市・神戸市住まいの安心支援センター、神戸市消防局の皆さん、教員、院生によるデモや解説が行われた。



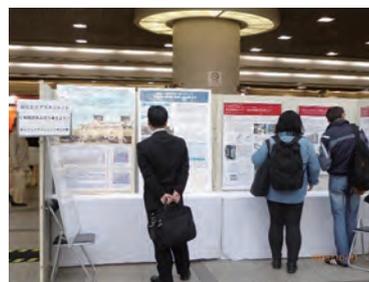
すまいの耐震化をすすめよう！  
by 神戸市・神戸市すまいの安心支援センター



あなたの愛する人を救えますか？  
＜心肺蘇生とAED＞ by 神戸市消防局



社会基盤のマネジメントを考える＜災害に強い社会を目指して～地震による災害と復旧活動を支える道路の維持・高耐久化＞ by 社会基盤マネジメント研究分野



減災エリアマネジメント＜地域みんなで考えよう！＞復興過程における減災化＜次の災害に備えていますか？＞ by 減災エリアマネジメント研究分野

### 3. おわりに

オープンセンターは今年度で14回目を迎えた。都市安全研究センターの地域連携事業の目玉の一つとして神戸市役所との共催でJR 神戸駅すぐのデュオ神戸にて開催した。体験型イベントでは子供からお年寄りまで多くの方が興味を持って参加し、ミニ教室では観客からの熱心な質問があるなど、都市安全研究センターの存在や地域社会に根ざした研究機関を目指す姿勢、また神戸市役所が精力的に行なっている耐震化キャンペーンなど安全安心に係わる様々な活動について少なからず理解していただけたのではないかと思います。

# フラッグフットボールを通しての地域との交流

アメリカンフットボール部レイバンス

マネージャー 平通 奈実（国際文化学部3年生）

## 1. 背景～環境の変化～

アメリカンフットボール部は1975年創部で、現在までほとんどの間1部リーグに所属しています。2015年のリーグ構成は国立大学が2校、私立大学が6校です。私立大学はスター選手を獲得し、また付属の高等学校や中学校から選手を育成することができ、そして練習の環境も国立大学よりも良いため、同じ1部リーグでも上位チームと下位チームの間に大きな差があるというのが大きな課題でした。しかし、2015年にアメリカンフットボール部が普段利用している国際文化学部のグラウンドの人工芝化が実現しました。よりよい環境が整い、いよいよ強豪校に劣らない環境で練習することができるようになりました。残る課題は資金面や選手の獲得のみとなりました。これまでも、もっと地域の人を巻き込んだ活動を行えないか、そのためにはどうすればアメフト部が地域の方々に貢献できるのかということを考えてきました。そして良い環境が整った今、地域での活動をより一層発展させ、より多くの人々に応援してもらえるようなチームでありたいと考えました。

## 2. 背景～子供たちのスポーツ離れ～

ゲーム産業等の発達に伴い、最近の子供は外で遊ぶ機会が減少し、スポーツ離れが進行しています。しかし、スポーツは子供たちの成長過程において、社会性の形成や身体能力の向上といった大きな役割を果たしています。そういったスポーツの重要性を見直し、地域の子供たちにスポーツをする機会を提供して、その楽しさを知ってもらうことが必要です。そこで、アメフト部が直接指導を行うことで、地域のスポーツ活動の推進に貢献できるのではないかと考えました。

## 3. 企画の概要

フラッグフットボールは、アメリカンフットボール部の簡易版で、タックルなどの危険な要素を除いたものです。人体接触が少なく安全で、学年や性別を問わず楽しめるスポーツです。また、各々の役割が明確であるため、スポーツ導入に適しています。作戦をチームで話し合うという点でも、コミュニケーション能力の向上にもつながります。2011年より学習指導要領にも加えられ、教育的価値の高さが注目されています。

我々はこれまでも小学校のフラッグフットボールの授業支援として地域の小学校などを訪問してきました。フラッグフットボールを通して交流した小学生を神戸大学に招き、大会を開催することは前々から望んでいたことでした。小学校と良い



関係が築けてきたことと、グラウンドが人工芝となったことをきっかけに大会を開催することを決定しました。参加者を集めるために各学校の先生に案内の配布をお願いするとともに、小学校のホームルームにお邪魔し宣伝をさせていただいたりしました。

#### 4. 実施報告

7月22日、24日には事前の練習として高羽小学校に訪問し、参加する子供たちの指導をしました。以前体育の授業支援をさせていただいていたのでランやパスといったフラッグフットボールの基本となる動きから、試合までしっかり練習することができました。

そして7月25日に人工芝の神戸エレコムグラウンドで大会を開催しました。地域からは高羽小学校、鶴甲小学校、そして新庄小学校の子供たちも参加してくれました。はじめに少しチームで練習

する時間をとりました。6チームの参加があり、アメフト部の学生がそれぞれのチームに補助としてつき作戦の確認をしたりプレーのアドバイスをしたりしました。

いよいよ試合が始まると、子供たちは真剣な表情で取り組んでいました。6チームだったので総当たりですべてのチームと対戦することができました。試合ではパスがうまく通らない、相手のフラッグが取れないなど、うまくいかないときの悔しさもありました。しかしそれでもどうすればうまくいくのかを子供たちが考え、お互いに声を掛け合っている姿が見られました。いいプレーができたときはアメフト部学生と一緒に喜んでいました。あまりいい結果とならなかったチームの子供も生き生きとしていて、楽しんで帰ってもらうことができたと思います。



#### 5. 今後の展望

神戸大学アメリカンフットボール部の主催で大会を開催するのは初めての試みでした。授業支援や、アメフト部員に教えてもらったことを発揮する場として大会ができたことには大きな意味があったと感じました。今回の大会を経験して、すでに「来年は優勝する」と闘志を燃やしている子供もいました。成果を発揮することができ、フラッグフットボールに対するモチベーションにもつながっていたことをとても嬉しく思いました。フラッグフットボールの授業支援というかたちでこれからも小学校との良い関係を

続けていき、今回のように大会でその成果を発揮できる機会をつくればと思います。大会を毎年恒例にし、より多くの地域の小学生を巻き込んだ大会にしていきたいと思います。

このような大学生の能力を生かした地域との交流によって、将来神戸大学、そしてアメリカンフットボール部に入りたいと思ってくれる学生が増えることを願っています。



# 「神戸在宅呼吸ケア地域連携 MAP の活動効果検証」 活動報告

保健学研究科 藤本由香里

団体名：神戸在宅呼吸ケア勉強会

## 【はじめに】

少子高齢化社会を迎えた本邦において、呼吸器疾患患者は増加の一途を辿っている。高齢者の呼吸器疾患は慢性化するケースが多く継続したケアを必要とし、症状の増悪による入院の繰り返しが医療費の圧迫に繋がっている。

近年、医療費削減を目的に入院期間を短縮し、病院での治療から在宅でのケアに医療体制がシフトされている。しかし、病院と地域の医療体制の連携不足や在宅医療の知識・技術・マンパワー不足により十分な呼吸ケアが受けられない患者や、自宅に戻ることができない高齢者が多く存在する。今後は、より重症な患者も在宅生活が必要になる時代が来ることが予測され、医療従事者のスキルアップや地域連携の意識向上が急務である。

## 【神戸在宅呼吸ケア勉強会での活動】

神戸在宅呼吸ケア勉強会は、平成24年12月に兵庫県内での在宅呼吸ケアネットワーク構築および呼吸ケアスキルの底上げを図ることを目的に発足し、医療従事者を対象に定例勉強会（1回/月）や研修会（4回/年）を開催している。発足から4年が経過し、兵庫県内の訪問看護ステーション等約100事業所とのネットワークが構築された。（図1, 2）

平成26年に兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会に登録されている事業所を対象に呼吸ケアに関するアンケート調査を実施した。その結果、アンケート返答を得た医療従事者のうち90%が「現在の呼吸ケアに難渋している」と回答し、呼吸ケアが十分に実施されない理由として「知識・技術の不足」が多く挙げられた（図3）。また、在宅療養中の慢性閉塞性肺疾患（COPD）患者を対象としたアンケートでは、60%以上が日常生活動作の中で「疲労」「息切れ」を原因として日常生活動作が難しいと感じており、「息切れ」に対する対策方法の情報を求めていることが明らかとなった。

アンケート調査から明らかとなった問題を解決するべく、医療従事者向けの「在宅 COPD ケアポケットマニュアル」（図4）及び COPD 患者向けのセルフマネジメントパンフレット「自宅で出来る！呼吸リハビリテーション～COPD 患者さんの充実した毎日のために～」（図5）を作成し、各施設に配布した。再度アンケート調査を実施したところ、各資料を1ヶ月使用した医療従事者および COPD 患者双方ともに、呼吸ケアに必要な情報の量と質が向上したという結果を得た。

## 【神戸在宅呼吸ケア地域連携 MAP（図6）】

呼吸ケアが必要な患者が地域や在宅に戻れない原因の一つとして、直接的な治療に携わる医師・コメディカル等医療技術職だけでなく、地域連携に携わる全ての職種での呼吸器疾患の認知度の低さや知識不足が挙げられる。また、勉強会を開催していく中で、呼吸ケアを必要とする患者に訪問看護を導入したい場合でも各訪問看護ステーションで可能なケアの詳細がわからない、といった声も多く聞かれた。そこで、呼吸ケアに特化した MAP を地域に配布し呼吸ケア必要性の認知度を高め、円滑な在宅でのケア導入を促進することを目的とし、本 MAP を作成した。



図1 定例勉強会(座学)の様子



図2 定例勉強会(実習)の様子



図3 平成26年 在宅医療従事者を対象としたアンケート調査結果

本MAPには、掲載に同意を得た訪問看護ステーションの施設名・住所・連絡先（TEL・FAX・E-mail）、営業日・営業時間、24時間対応可否、特別加算算定の有無、呼吸ケア対応の可否（HOT・NPPV・TPPV）、3学会合同呼吸ケア指導士人数（看護師、理学療法士、作業療法士）、呼吸ケア指導士人数（看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士）、PRの情報を地域ごとに掲載した（図7）。今後、本MAPを兵庫県内の病院や訪問看護ステーションに加え、あんしんすこやかセンター、地域包括支援センター等地域連携に関連する812施設に配布し、MAPの導入を図る予定である。

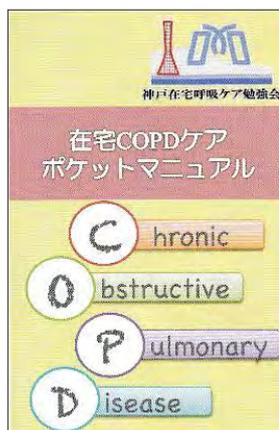


図4 医療従事者向け在宅COPDケアマニュアル



図5 COPD呼吸患者用セルフマネジメントパンフレット

### 【神戸在宅呼吸ケア地域連携MAP事前アンケート調査】

本MAPを地域に本格導入する前に、神戸在宅勉強会の平成27年の定例勉強会の受講者を対象に事前アンケート調査を実施した。アンケート項目として、地域連携MAPに関して①必要性、②使いやすさ、③情報量、④レイアウト、⑤掲載の可否について、を挙げた。医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士からなる計35名からデータ欠損の1名を除く34名の回答を以下にまとめた。

使いやすさについては、30名が“とても使いやすい”“使いやすい”と回答した。レイアウトについては、34名全員が“とても見やすい”“見やすい”と回答した。情報量については、27名が“ちょうど良い”と回答したが、その他は“多い”または“少ない”と回答した。必要性については、33名が“とても必要である”または“必要である”と回答した一方、1名は“必要ない”と回答した。掲載の可否については、18名が“掲載してほしい”または“掲載しても良い”と回答したが、11名が“どちらでもない”、1名が“掲載されたくない”と回答した。“どちらでもない”と回答した理由としては、事業所責任者でないため方針がわからないといった回答や呼吸ケアのスキルが十分でないという意見がみられた。



図6 兵庫県在宅呼吸ケア地域連携MAP

施設名	△△訪問看護ステーション									
住所	連絡先			営業日・時間			24時間対応体制			
〒6***-0*** ××市××町××-××-××	TEL: ***-**** FAX: ***-**** kobe****@***.jp			月～土 9:00-17:30			○			
特別加算の算定	呼吸ケア対応の可否			3学会合同呼吸療法認定士			呼吸ケア指導士			
	HOT	NPPV	TPPV	Ns	PT	OT	Ns	PT	OT	ST
○	○	○	○	1	0	1	1	0	0	1
PR	住み慣れたご自宅で安心して過ごして頂けるようサポートしていきます。									

図7 MAP掲載情報

### 【おわりに】

開始当初は、本MAPを地域に配布した後広範囲にMAPに関してのアンケート調査を実施し、アンケート結果からMAPの改訂版を作成する計画であったが、予算上改訂版MAP作成が困難となり、アンケート調査の規模を勉強会受講者のみとし、地域へのMAP配布までに留まった。しかし、小さな規模であったがアンケートの結果から、呼吸ケアに消極的な訪問看護ステーションが多いという問題点も明らかとなった。一方で、呼吸ケアの必要性を認識し、今後呼吸ケアに精通するスタッフを増やし訪問看護ステーションで提供できるケアの一つとして導入していきたいという前向きな意見も多く、MAPを通じた活動を続けることでさらなる地域連携推進に繋がる可能性が示唆された。

呼吸ケア勉強会が発足して以降、勉強会・研修会を通して多くの病院や事業所から、様々な職種の方々に参加をいただいている。今後も活動을続け、より密な地域ネットワークの構築および地域連携の強化ができるよう努力したい。

# 神戸市しあわせの森における地域特産里山資源の探索

神戸学生森林整備隊

## 【はじめに】

日本は国土の三分の二が森林におおわれている。森林面積の多くは人工林や里山など、人の手による管理を必要とする森林であるが、現在はこれらのほとんどが、管理放棄されている状態にある。森林を持続的に管理していくためには、多大な労力と費用が必要であるため、国内の森林整備は遅れているのが現状である。このような問題を解決するため、全国各地でボランティア団体やNPOが森林整備活動を行っている。しかし、素人判断による誤った知識に基づいた森林整備が行われ、森林の健全な生育を妨げている例もみられる。また、ボランティアの高齢化が進み、活動が持続しない例もみられる。

神戸学生森林整備隊（以下「森林整備隊」）は、森林科学の専門知識を学んだ学生ボランティアの手により、科学的データに基づく管理を行うとともに、大学を母体とすることによってボランティア活動の持続性を実現することを目的として、平成25年度に発足した。

森林整備隊の主な活動場所は、平成28年度に開園予定の神戸市営の森林公園、「しあわせの森【正式名称：キーナの森（平成27年7月決定）】」である。キーナの森は、隣接する国営明石海峡公園（神戸地区）および神戸市営しあわせの村と合わせると、神戸市内で最大級の面積をもつ連続した緑地になる。キーナの森では、開園にむけて園内にある耕作放棄地や放置里山林の整備が進められている。

「キーナの森」は、隣接する「国営明石海峡公園（神戸地区）」（平成28年度開園予定）とともに神戸市における「生物多様性保全のシンボル拠点」として整備する公園です。放置された里山に手を入れることで、希少種の保護を含めた豊かな生物多様性の保全・再生を行うとともに、環境学習や市民活動の拠点として活用することを目指しています。（平成28年度開園予定）

神戸市 建設局 公園部 管理課 HP より

<http://www.city.kobe.lg.jp/life/town/park/intoro/shiawasenomori.html>

## 【活動報告】

今年度は、里山資源の探索を中心に行った。里山は人が利用することで維持されてきた山であるが、生活様式が変化した現在はほとんど利用されず荒廃が指摘されている。そこで現在でも有効に用いられる資源を探索することでその解決にあたることにした。1年を通して、林道作り・薪割り・炭焼き・ヤマモモの雌木探し・シイタケの椀木作り・ガマズミのジャム作り・カブトムシの産卵床づくり・皆伐更新試験地の調査など、様々な活動を行った。これらのうち何点かの活動について、以下に記す。

### ■林道作り

森林内で作業を行うには、作業道の確保が必要である。そこで昨年度同様、道作りを行った。里山整備ではしばしば、ただ道を作るだけの活動が行われることがある。しかしそのような活動は一

時的に見た目を整えるだけで、発展性は望めない。そのような活動にならないよう、今後の活動に必要な道を作り、また伐採した木は林道の補強に使うなど、資源を無駄にしないよう活用した。



道作り（左：作業前、右：作業後）

### ■炭焼きの実践

キーナの森には炭焼き窯の跡が多数あることから、薪炭林であったと考えられる。再び炭作りを行うきっかけとして簡易的な炭焼きであるドラム缶炭窯（松村式改良型ドラム缶炭窯）を用い、2回炭焼きを行った。1回目は農学部の授業「実践農学」と連携し、外部から専門家をお招きし、指導を受けながら実施した。2回目は、教わったことをもとに自分たちのみで行った。2回目は地元の方など、一般の方々で行った。2回目は残念ながら失敗に終わってしまったが、参加者の間で再挑戦しようという前向きな話に繋がった。炭焼き窯にサツマイモなども忍ばせるなど炭焼き以外に楽しめる要素を盛り込むことで、しんどい活動、とならないようにした。



左から：ドラム缶に詰めた材料、出来上がった炭の取り出し、完成した炭、忍ばせたイモを楽しむ参加者

### ■ガマズミジャム作り

今年度はガマズミの実が豊作であった。そこで、それらを収穫して、ジャムを試作した。ガマズミの実は小さく、中には大きな種があり、取り出す作業がとても手間だが、甘酸っぱいジャムが出来た。



左：ガマズミの実、中：実を一つ一つ取り外す、右：完成したジャム

### ■皆伐更新試験地の調査

放置された里山の管理手法として、小規模に全ての木を伐採する小面積皆伐がある。キーナの森では昨年度に皆伐試験を行っており、今年度はその経過を調査した。里山管理はともすればやりっ放しにされてしまうことがあるが、今後の里山管理に活用するために、今回取ったデータをもとに解析し科学データに基づいた管理を行う資料とする。

### 【おわりに】

今年度は、里山資源の探索を中心に行ったが、昨年度に比べより実践的な活動が出来た。来年度以降は、里山と隣接している、人が植栽を行った緑化地においても活動を展開したい。

# 市街地の社叢を活用した環境教育の実践

神戸大学保全生態学研究会

都市域に存在する森林は様々な機能を持ち、住人に多くの恩恵をもたらしている。しかし、多くの都市林は人間活動の拡大に伴い小面積化し、人工的環境に囲まれた孤立林として存在している。

これにより、地域本来の在来種の絶滅や外来種・園芸種の侵入繁茂などの事例が多く報告されている。神戸大学保全生態学研究会は、上記のような都市林に人為的管理を加えることで、都市孤立林が抱える問題に対処し、これを保全するよう活動することを目的として2005年に発足した。

都市林の恩恵を受ける都市住民（特に子供）は、日常生活において自然の森に触れる機会が少ない。都市林を一般公開し、自然観察や環境教育の場として提供することによって、都市住民の環境意識の向上と、都会の子供たちの環境教育に役立てることができる。本研究会では、学生地域アクションプランの予算を活用して、地球環境の未来を担う子供に環境保全の大切さを啓蒙し、今後も都市林の保全が続くよう、地域住民参加による森林管理の仕組み作りを目指した環境教育の実践を行った。

本活動は兵庫県西宮市の西宮神社社叢（通称：えびすの森）を拠点として行った。主な活動内容は以下の通り。

- 5～10月：えびすの森の植生調査・森林整備（枯れ木の伐採、枝払い等）、他の社寺林における観察・勉強会の実施
- 11月：えびすの森 一般公開の開催
- 3月：春休み子供観察会の開催

11月の一般公開では、公募によって申し込んだ参加者らが、普段は立ち入ることができないえびすの森を散策し、清掃を行うとともに、森の植生、保全活動について学んだ。

神戸大学農学研究科の東 若菜研究員の講義では、人間活動の拡大によって、社叢の多くが、市街地や住宅地、田園地区などに孤立して存在しているため、自然状態を維持するのが困難になっていること、繁殖力の強い外来種や園芸種が森の中に侵入し、在来種を脅かし、もとの植生が衰退してしまっていること、などを学んだ。参加者らは、えびすの森に侵入した外来種のシュロ



西宮神社の社叢は市街地に残された貴重な自然



えびすの森一般公開様子



2015年11月24日神戸新聞

を駆除し、不法投棄やカラスなどが持ち込んだゴミの片付けを行った。このイベントには、毎年30人を超える応募があり、市民の自然に対する意識の高さを表している。また、このような活動を通して社叢に対する親近感がはぐくまれることが期待される。本活動は2015年11月24日の神戸新聞に掲載された。

3月の春休み子供観察会では、地域の小学生を対象に、森に親しんでもらうことを目的としている。午前中は、神戸大学農学部石井弘明准教授から、森の植物と生態系に関する講義を受け、学生の指導のもと、樹木を計測し、葉を集めるなどの森林観察を行った。さらに、都会の子供に森での遊びを体験してもらうため、クスノキの巨木に登り、木に設置したブランコに乗るなど、学生が考えた自然遊びの企画も用意した。午後からは、教室に戻り、集めた葉を識別するゲーム形式の学習を行った。

今後も、このような活動を通して、都市域に残された貴重な自然を保護するとともに、都市林を活用した都市住民（特に子供たち）への環境保全の啓蒙活動を実施し、住民参加型の都市林管理の仕組み作りに貢献していきたい。



春休み子供観察会の様子

# 里山ビオトープの資源活用と魅力づくり at 真南条

ささやまファン倶楽部 代表

農学部3回生 馬場 加奈子

## ・はじめに

ささやまファン倶楽部は2010年の農業・農村プロジェクト演習の授業をきっかけに発足し2015年度で5年目の活動となった。活動場所である篠山市真南条地区は武庫川の源流であり、地域住民は環境に優しい農業に取り組んでいる。我々は当初、山頂の休憩所を制作するために活動していたが数年前に完成し、その後は活動内容を広げつつある。前年度末には団体の方向性を決めるため、地域住民との会合を行った。出てきた課題の中で当団体に取り組むべき内容を考え、学生が整備をしている由利山を地域住民に有益な場所とするためにはより細かな整備が必要であり、また学生から発信すべき真南条の良さがあるという結論に至った。2015度は、地域住民が大切にしている「自然環境」を活かす活動を主軸として「真南条の魅力作り」をテーマに活動を行うこととした。

## ・ビオトープにおける橋製作

真南条には、休耕田を利用して作られたビオトープが以前より存在する。複数の水田が段となって連なっており、生物は水田に生息する種類を始め貴重な水草なども確認されている。しかしながら、景観は単なる休耕田であり地域関係者全員に存在を知られている訳ではない。そんなビオトープを人にとっても親しみやすい憩いの場とするためビオトープ内の島に向かって橋を架けることにした。

計画段階ではまず部員で案を出し合い、製作法を学生なりに考えた後に地域住民との話し合いの場を設けた。学生の実現可能性も含めて話し合い、地域住民の意見も取り入れた上で形にしていった。手に入る材料や費用に限られる中、地域在住の大工にもアドバイスを頂き、地域に自生している竹をベースに間伐材を利用して橋を制作することとなった。実際の制作は学生、地域住民以外にも地域を訪れる社会人ボランティアと共にいった。真夏の暑い時期であったが多くの方に手伝っていただき、学生では知りえない木材や竹の扱い方を教えていただくことができた。1月時点での完成は1段目のみだが、2月以降順に上段の水田までの延長を予定している。また生物種の多様性をより深く知りアピールするため、植生調査を行う予定である。



## ・「由利山」における里山整備

発足当初から整備を進めてきた地域内の里山「由利山」であるが、前年度末時点で山頂に休憩所ができそこに続く道が完成していた。しかし道の台木が腐食するなどして道

が通りにくくなっていたり、木で枠組みしていた階段が崩れかかっていたりする箇所が存在した。また山の裏へと続く道は背丈ほどの雑草が生い茂り進める状態ではなかった。前年度末の地域住民との会合では、小さな子供や高齢者が散歩コースにできるような気軽で明るい山にしてほしいという要望があった。そのため今年度は、綻びた道の整備と雑草の処理を中心に里山整備を行った。

道の整備には新たに由利山内で間伐した木材を用いた。地域住民と共に補修を行い、補修完了直後から地域の子供が山を登り、休憩所で遊ぶ様子を見ることができた。また草刈りは夏前と8月の2回行った。1度刈っても夏には背丈を越えるほどの草が生い茂る状態であった。植生も限られており、セイタカアワダチソウなどの外来種が卓越している箇所も存在した。草刈りは年に数回行うことで植物の多様性が増し、季節ごとに様々な花が咲くようになるそうだ。来年度は草刈りの頻度と時期を調べ、より多種多様な草花の生きる豊かな里山を目指す。

## ・地域の素材から発案した活動

### 1. 草木染め

里山整備の一環として草刈りを行う中で、外来種であるセイタカアワダチソウが由利山の雑草でも大半を占めていることに気づいた。セイタカアワダチソウは秋口には背丈を越える高さまで成長するため、地域の景観に大きな影響を与えていた。そのような「邪魔者」であるセイタカアワダチソウを活用できないかと考えた結果、花の部分を用いて草木染めに挑戦することにした。方法は文献から調べ、他にも雑草として多く生えていたススキやネコジャラシ等の何種かの植物と共に試験的に草木染めを行ったところ、セイタカアワダチソウは他の植物に比べ染めやすく色が綺麗に出ることが判明した。そこで2回目はセイタカアワダチソウのみで1m四方面程度の布を染めた。大きな布であっても薄いレモン色にムラなく染まり、草木染めの材料としてのセイタカアワダチソウ活用は可能であることが示せた。今後はこの布を用いて地域産の新たな製品を考案していく

ことに加え、異なる季節の植物や様々な手法を用いて草木染めを行い、レパートリーを増やしていく予定である。



### 2. 松の葉サイダーの試作

自然を利用した製品づくりの内の1つとして、初夏に由利山の松の葉を用いてサイダーの試作を行った。由利山山頂付近には松の木が数本自生しており、その若葉を材料とした。砂糖水と若葉を瓶詰めし、日光に当てて数日置いた。試飲をしてみると爽やかな風味の微炭酸となっていたが、漢方薬のような草の香りもしたため、そのまま製品化するのは困難であるという結論に至った。加えて食料品の製品化は法律や衛生面でも厳しい事から、当面は草木染めの製品化を主に目指す事とした。

### ・来年度の活動予定

今年度の活動では地域住民との交流の中で自然や農業に関して新たに学ぶ事も多く、学生の知識不足を痛感する事となった。自然の資源を活用した魅力作りを考えるうちに、魅力を他の学生や都会に在住する人々に伝える為には自分達が地域の自然環境に関して深く理解する必要があると実感した。来年度は今までに述べた各活動の目標を達成する為にも真南条にて植生調査を行う。加えてそれらの生物について知識を深めるため勉強会を行う案も上がっている。必要な知識を学びつつ、外部に発信できるような形にしていく予定である。

# 平成27年度 学内公募事業 募集要項

## 平成27年度「地域連携事業」募集要項

1. 目的  
各部局等で計画している地域連携事業に要する経費の一部を支援することにより、本学の地域連携事業の一層の推進・発展を図ることを目的とします。
2. 対象テーマ  
地域活性化について、自治体・地域団体等と連携した活動
3. 対象取組事業  
部局の支援のもとに下記の①～③いずれかに該当する事業を対象とします。
  - ① 協定締結に基づく、もしくは協定締結につながる取組事業
  - ② 自治体等や地域団体と協同で行う萌芽的事業
  - ③ 複数部局による取組事業注) ただし、以下の部局を除く。
  - ・人文学研究科
  - ・人間発達環境学研究科
  - ・保健学研究科
  - ・農学研究科※ 昨年度までの採択例については産学官連携グループまでお問い合わせ下さい。  
※ 兵庫県内を中心とした活動が望ましい。
4. 支援額及び採択件数（予定）  
支援額 1事業につき 30万～80万円  
採択件数 3～7件
5. 対象  
全部局及び各センター（地域連携センター及び同センター設置部局、人間発達環境学研究科を除きます。）
6. 公募期間及び結果通知  
受付期間：平成27年3月25日（水）～4月24日（金）  
結果通知：平成27年5月中旬
7. 提出書類
  - ① 平成27年度「地域連携事業」申請書
  - ② 所要経費内訳書※地域連携推進室ホームページより様式をダウンロードできます。
8. 対象事業経費  
謝金、旅費、印刷費、会議費（会場使用料、機材使用料等）、消耗品費等  
※光熱水費、備品費、飲食費等の経費は対象外です。
9. 事業報告
  - ① 平成27年度地域連携活動発表会（12月頃開催予定）でのプレゼンテーション
  - ② 平成27年度地域連携活動報告書（平成28年3月発行予定）に掲載する実施報告の提出（平成28年2月中旬までに提出願います）
  - ③ 下記報告書類の提出  
（所定の様式により平成28年4月中旬までに提出願います）
    - ・実施報告書 1部
    - ・実施経費経理報告書 1部

### 提出及び問い合わせ先

連携推進課 産学官連携グループ 078-803-5427, 2394 担当：山村  
e-mail : [ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp](mailto:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp)  
ホームページ : <http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>

### 《選考》

地域連携担当理事及び地域連携推進室長を含め8名程度で構成する審査委員会で、次の方針に基づいて審査します。

### 審査方針

- ① 計画内容や実施方法が、活動の目的に沿って具体的かつ明確に設定されているか。
- ② 地域社会を対象に、活性化を図ろうとする分野が明確化され、かつ実現性の確保に適切な配慮がなされているか。
- ③ 自治体や他大学、NPO等と部局を挙げての組織的な連携を図る取り組みとなっているか。
- ④ 地域連携の取り組みが大学の教育・研究に結びついているか。
- ⑤ 他の地域のモデルとなり得るような先導的取組であるか。
- ⑥ 地域文化の振興、育成した人材の定着・活用及び地域の活性化につながるような取り組みとなっているか。
- ⑦ 今後の展開の見通しが確実なものであると考えられるか。
- ⑧ 経費の使用目的が妥当なものとなっているか。

## 平成27年度 「学生地域アクションプラン」募集要項

1. 趣旨  
地域を元気にする学生の様々な活動は、地域に歓迎され、また、期待されています。神戸大学地域連携推進室では、地域に根ざした、地域を活性化しようとする学生の活動を支援するため、「学生地域アクションプラン」を公募します。
2. 募集対象  
学生の力を活かし、地域社会と連携して地域を活性化しようとするための活動。  
ただし、特定の政治、宗教、営利等の活動を目的としないこと。  
※ 兵庫県内の活動であることが望ましい。
3. 応募資格  
神戸大学の学生が主体となって組織され、活動を支援する教員と共に地域活性化のための取組みを行う団体。  
※ 事業責任者（申請者）は、教員とします。
4. 支援額及び採択件数（予定）  
申請上限額は25万円とし、2～5件の採択を予定しています。
5. 支援対象経費
  - ① 謝金：講演会の講師等に支払う謝金等
  - ② 旅費：講演会の講師等に支払う交通費及び宿泊費等
  - ③ 印刷費：ポスター、チラシ、報告書の製本・印刷費等
  - ④ 会議費：学外施設の会場使用料等
  - ⑤ 消耗品費：文房具、製作用資材等※ 予算配分は、申請教員に対して行いますので、同教員により執行していただきます。
6. 公募受付期間  
平成27年3月25日（水）～4月24日（金）
7. 結果通知及び事業費配分予定  
平成27年5月  
※ 採択、非採択に関わらず、すべての申請教員及び代表学生に結果を書面で通知します。
8. 提出書類
  - ① 平成27年度「学生地域アクションプラン」申請書
  - ② 団体概要（会則、構成員名簿等）
  - ③ 活動企画書
  - ④ 収支予算書※ 地域連携推進室 Web ページから様式をダウンロードして下さい。  
※ 書類作成にあたって不明な点があれば、別記問合せ先までご連絡ください。
9. 提出先  
研究推進部連携推進課産学官連携グループ  
(文理農キャンパス正門すぐ 連携創造本部棟 5 階事務室)
10. 事業報告（採択者に義務が生じます）
  - ① 平成27年度地域連携活動発表会（12月開催予定）でのプレゼンテーション
  - ② 平成27年度地域連携活動報告書（平成28年3月発行予定）に掲載する実施報告の提出（平成28年2月中旬までに提出願います）
  - ③ 下記報告書類の提出  
(所定の様式により平成28年4月中旬までに提出願います)
    - ・実施報告書 1部
    - ・実施経費経理報告書 1部

### 問い合わせ先

地域連携推進室 Tel：078-803-5977 担当：佐々木  
連携推進課 産学官連携グループ Tel：078-803-5427, 2394 担当：山村  
e-mail : [ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp](mailto:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp)  
ホームページ : <http://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/>

### 《選考について》

地域連携担当理事及び地域連携推進室長を含め、8名程度で構成する選定委員会で、次の方針に基づき選考します。  
なお、学生の自主的な活動であることを重視するため、申請者である教員名を伏せて選考します。

### 審査方針

- ① 計画内容や実施方法が、活動の目的に沿って具体的かつ明確に設定されているか。
- ② 地域社会を対象に、活性化を図ろうとする分野が明確にされ、かつ実現性の確保に適切な配慮がされているか。
- ③ 自治体や地域住民、NPO等と協働で実施する組織的な連携を図る取り組みとなっているか。
- ④ 地域における活動が実施団体等の構成員の地域貢献に対する意識の向上に繋がっているか。
- ⑤ 地域における保健・福祉、社会教育、まちづくり、学術・文化・芸術又はスポーツの振興、環境保全、地域安全等に貢献する活動であるか。
- ⑥ 経費の使用目的が妥当なものとなっているか。

※ 申請書の電話番号等の情報は、申請団体との連絡を目的としており、これ以外には使用しません。



# 付 録



—第17号—

## 地域・だいがく連携通信 —神戸大学地域連携ニュース—

神戸大学地域連携推進室  
〒657-8501  
神戸市灘区六甲台町1-1  
TEL : 078-803-5427  
FAX : 078-803-5389  
E-mail : ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

# 「灘の酒がつなぐ地域と大学」を 沢の鶴資料館にて開催

**プログラム** 2015年8月5日(水)16:00-

**第1部** 16:00- 講演 沢の鶴資料館 司会 甲斐祐子さん

1. 清酒醸造について  
(沢の鶴製造部 森脇政博主任技師)
2. 日本の食を支える微生物・酵母とカビ  
(神戸大学大学院農学研究科 竹中慎治教授)
3. 茜彩(あかねいろ)について

**休憩** 17:05- 館内自由見学

**第2部** 17:30- 利き酒 にしごう会館

主催 神戸大学 沢の鶴株式会社 灘区役所

平成27年8月5日(水)、神戸大学・沢の鶴株式会社・灘区役所の主催でシンポジウム「灘の酒がつなぐ地域と大学」を、沢の鶴資料館にて開催しました。

このイベントは平成26年に11月に神戸市において「神戸灘の酒による乾杯を推進する条例」が施行されたこと、また神戸大学と沢の鶴の間で共同開発した日本酒「茜彩」を使った「茜すばあくりんぐ」が平成27年3月に発売されたことをきっかけに企画されました。

16時から始まった講演は、遠藤卓男区長(神戸市灘区)の挨拶から始まり、その後森脇政博主任技師(沢の鶴製造部)より灘の酒造りの歴史や日本酒醸造について、竹中慎治教授(神戸大学農学研究科)より学術的見地から補足説明があり、二人のディスカッション形式でお話が進みました。



遠藤区長による挨拶

第2部では会場を「にしごう会館」にうつし、内田一徳理事(神戸大学)の挨拶の後、一同灘の酒を掲げて、西向賞雄取締役

役(沢の鶴)のご発声で乾杯が行われました。沢の鶴より「茜彩」を含む4種類のお酒を提供いただき、参加者は利き酒を楽しみました。

神戸大学と灘区とは平成16年に連携協定を締結し、その後、様々な事業を行ってきました。その事業の一つに地元企業である沢の鶴と大学の地域共同研究事業が行われ、さざんか酵母を使った新しいタイプの日本酒「茜彩」や「茜すばあくりんぐ」等が商品化されています。

今回のシンポジウムでは地域の方々や学生・教職員等約70名の参加があり、参加者は灘の酒や地域の産学官のむすびつきを体感できる和やかなイベントとなりました。こうしたイベントが開催できたのも今まで大学が地域の産・官とともに信頼関係を培ってきた証です。今後も地域の様々な機関と連携・協力しながら地域の活性化に寄与していきます。



さざんか酵母を使用したお酒



講演の様子



会場の様子



灘の酒でカンパイ!

# 鶴甲団地再生・活用プロジェクト

## — 学内公募連携事業より

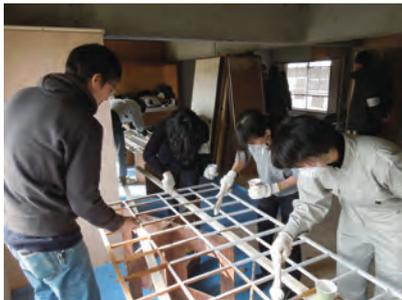


今年6月、神戸すまいまちづくり公社と工学研究科が連携協定を締結しました。協定に基づき、現在神戸市灘区鶴甲団地で団地再生の試みが行われています。「地域連携事業」でも、「鶴甲団地再生・活用プロジェクト」が採択されました。中心で活動されている建築学科の三輪康一先生にお話を伺いました。

### — 取り組みのきっかけをお教えてください。

鶴甲団地は、1960年代に開発された住宅団地です。この中に、まちづくり公社が、賃貸住宅を持っていますが、昨年その空家のリニューアルを学生の意欲的な発想で考えられないかとご相談がありました。合わせて、オールドタウン化した鶴甲団地全体の活性化を考えたいということでした。私たちの研究室では、これまでもニュータウンの空間変容と維持管理に関する研究を行ってきました。これはその一環です。

### — 平成26年から始められたのですか。



DIYでお部屋をリノベーションや生活スタイルを考慮したものなど、実現可能性をさぐりながらの提案がありました。

会社においても、プロの建築家を対象にリノベーション案が公募されました。2案が選ばれたのですが、それを作るときにDIYで壁を塗ったりするのに学生達が関わりました。

会社は団地に若い世代に住んでもらいたいとの意向がありました。そこで建築学科の学生を対象に、シェアハウスとして住むかどうかニーズ把握のアンケート調査を行いました。

そうです。昨年度は、研究室の学生にリノベーション案の提案を呼びかけました。構造的に壁が抜けない制約の中、学生のため

のシェアハウス

こういった活動を今後も続けていきたいということで、今年度の協定締結にいたしました。

### — 平成27年度の活動はいかがでしょうか。

会社では、8月に、2回目のリノベーション案の公募をされました。今回も学生が施工にDIYに関わることも計画しています。

学内アンケート調査の結果、学生シェアハウスは可能性があるということで、さらに「こういうシェアハウスはどうだろう」と7月31日に学生主導のワークショップを開催しました。また、公募作品も含めたリノベーションプラン集の編集・発行をしようとしています。

鶴甲団地の魅力発見、発信ももう一つのテーマです。団地全体の住民の方々に、団地の住み心地やお気に入りの場所、魅力などについて、ヒアリング調査を実施しました。学生によるインタビュー調査は、住民の方々にとって、若い人とのふれあいということで好評でした。

また、鶴甲団地の魅力発見のための“まち歩き”や景観資源調査を行い、マップを作成しました。それらの結果を合わせて、魅力発見のための情報発信を計画しています。形態をマップにするのか、小冊子にするのかは検討中です。

学生が住民の方々のもとに調査に伺うと、学生から元気をもらうと、非常に好意的に対応していただきました。学生にとっても、話をお聞きする良い機会になりました。また、会社とは、毎月1回、情報交換を行い、情報共有をしながら進めています。



学生によるワークショップの様子

### — 今後の課題はいかがでしょうか。

神戸大学の発達科学部でも鶴甲団地活性化事業を行っているとお聞きしています。現在はまだ繋がりがありませんが、今後良い連携ができればと思います。

近年、住まいに対する需要や考え方も変わってきました。空家が増加し、リノベーションが重要になってきています。この分野は、建築技術だけでなく、不動産マーケットや法的整備といった、経済・法律などにも関わる新しい研究領域として考えて行く必要があると思います。



学生によるリノベーションの提案例

# 福崎町辻川界隈の町並みをジオラマ模型で再現



昔の様子を語る参加者

平成 27 年 8 月 8 日(土)～12 日(水)、兵庫県福崎町の辻川区公民館でワークショップ「みんなの記憶でよみがえらせよう!辻川界隈の町並み」が開催されました。

「柳田國男」が生まれた町である福崎町では、本学人文学研究科地域連携センターと継続して連携事業を行ってきました。このたび、柳田國男氏が育ったころの町並みをジオラマで再現できないかという相談がセンターに寄せられました。そこで、東日本大震災の復興支援として「失われた街」模型復元プロジェクトで、その地域の記憶を保存・継承活動を行っている本学工学研究科槻橋准教授に協力を依頼し、今回、共同型協力研究として辻川界隈のジオラマ模型を作ることになりました。

しかしながら、柳田國男氏の育った当時の環境が分かる資料があまり残っていなかったため、まず、現在の地形のジオラマ模型を作り、そこから地域の方々の記憶や思い出を聞き取り、記録することから始まりました。

公民館には辻川界隈の昔の様子を知る地域の方々が、わかるがわる訪れ、工学研究科や人文学研究科の学生・院生が中心となって聞き取りを行いました。「昔はここには大きな宿屋があった」など模型を頼りに記憶をたどりながら話す地域の方々のお話に耳を傾けながら、学生らがつぶさに記録していきました。この模型は今後、11月8日に福崎町エルデホールで開催されるシンポジウムにて展示される予定です。



熱心に話を聞く様子

## 「大学力を生かす地域創生懇談会」が開催されました

神戸新聞 2015年08月06日 木曜日 面名 朝三 13 3ページ

### 「大学力」地域にどう生かす

懇談会は県、同市、神戸商議所、神戸新聞社が地域発展に貢献するためにつづいた郷土振興調査会に、両大学が加わる形で「行われた。武田廣神戸大学学長は「国は各大学に、世界を自指すか地域に根ざすかという選択を迫っているが、神戸大は世界に発信しつつ、地域にもつながる大学を目指す」と述べた。清原正義県立大学学長は「県内高校との連携や、県内企業の魅力紹介などを通じ、4割程度のにとまる県立大学の県内企業就職率を8割上げる目標を達成したい」と説明した。井戸敏三知事は「新分野を切り開く産学連携プロジェクトを後押しする仕掛けが必要だが、予算の壁がある」と指摘。村田泰男神戸商工会議所専務理事は

#### 県内各界トップ

「大学が持つ知識や技術、活力を地域活性化につなげるため、兵庫県、神戸市、神戸商工会議所、神戸新聞社トップらと、神戸大、兵庫県立大学の学長が意見を交わす。『大学力を生かす地域創生懇談会』が5日、神戸市中央区の神戸ポートレナホテルで開かれた。」(森本尚樹)

### 研究成果 開示に期待

神戸大、県立大と意見交換



県内の各界トップらと神戸大、県立大の学長が意見を交わした懇談会  
＝神戸市中央区港島中町6

「大学の地域貢献活動は重要だが、大学の研究・教育レベルを高めることがひいては地域貢献につながる」と語った。神戸新聞社の高士薫社長は「懇談会を通じ、県内学生の県内就職率向上への仕掛けづくり、各大学の地域貢献事業を各地の地域創生に直結させる機会がつけられたら」と話した。

平成 27 年 8 月 6 日神戸新聞 朝刊 3 面

平成 27 年 8 月 5 日、神戸ポートピアホテルにて「大学力を生かす地域創生懇談会」が開催されました。

この会では、井戸敏三兵庫県知事、久元喜造神戸市長、村田泰男神戸商工会議所専務理事、高士薫神戸新聞社社長と本学の武田廣学長、清原正義兵庫県立大学学長が集まり地域創生のために大学の力をどう生かすことができるか話し合われました。

大学の学長を交えて地域の未来を語る懇談

会の開催は今回が初めてです。これをきっかけにさらに、大学と地域の結びつきが強まることが期待されます。

## 平成27年度 地域連携 学内公募事業

地域連携推進室では、学内の新しい地域連携の芽を育てるため、教職員や学生による地域活性化のための活動を支援しています。今年度は、次の各事業が採択されました。

### ● 地域連携事業（教職員対象）

国際文化学研究所	映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携
経済学研究所	兵庫県における「地域創生」-ASABAN プロジェクトの普及-
医学部附属病院	兵庫県喘息死ゼロ作戦
工学研究科	鶴甲団地再生・活用プロジェクト
工学研究科	タイムスリップウォークを通じた多世代災害語り継ぎ活動
都市安全研究センター	オープンセンターによる地域連携事業

### ● 学生地域アクションプラン（学生対象）

神戸大学アメリカンフットボール部	フラッグフットボールを通しての地域との交流
神戸在宅呼吸ケア勉強会	神戸在宅呼吸ケア地域連携MAPの活用効果検証
神戸学生森林整備隊	神戸市しあわせの森における地域特産里山資源の探索
神戸大学保全生態学研究会	市街地の社叢を活用した環境教育の実践
ささやまファン倶楽部	里山ビオトープの資源活用と魅力作り a t 真南条上

## 平成27年度 神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ事業助成

灘区との連携協定に基づき、教職員・学生からなる組織を対象に「地域の課題解決および魅力向上を目的として実施する活動・事業」に対して灘区が助成を行っています。今年度の採択事業は次のとおりです。

人間発達環境学研究所（教職員）	鶴甲いきいきまちプロジェクト
アートマネジメント研究会（学生）	小学生のためのコンサート
まちプロジェクト実行委員会（学生）	まちプロジェクト - まちTフェス'15

## 活動報告（2015年3月～2015年9月）

3月 16日	(大学)	大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成（灘区公募事業）公募開始
24日	(大学)	平成26年度第3回地域連携推進室会議
25日	(大学)	地域連携事業・学生地域アクションプラン公募開始
27日	(大学)	平成26年度神戸大学地域連携活動報告書を発行
5月 08日	(大学)	平成27年度第1回地域連携推進室会議
6月 17日	(工学)	工学研究科と一般財団法人神戸すまいまちづくり公社が連携協定締結
19日	(農学)	農学研究科地域連携研究セミナー（A-Launch）「第11回ドイツの土壌と食文化」
20日	(人文)	連続講座「丹波の歴史を知る・つなぐ」第1回
7月 18日	(人文)	連続講座「丹波の歴史を知る・つなぐ」第2回
25日	(人文)	「松岡鼎展」（福崎町（～11月23日））
31日	(人文)	人文学研究科と西脇市が連携協定締結
8月 02日	(保健)	「発達の気になる小学生とその家族のための支援教室」（神戸市立青陽須磨支援学校）
05日	(大学)	大学力を生かす地域創生懇談会（神戸ポートピアホテル） シンポジウム「灘の酒がつなぐ地域と大学」開催（沢の鶴資料館）
10日	(人文)	ワークショップ「みんなの記憶でよみがえらせよう！辻川界隈の町並み」（福崎町）（～12日）
9月 05日	(保健)	「第6回 Cinema Cafe」（神戸市立友生支援学校）
26日	(人文)	連続講座「丹波の歴史を知る・つなぐ」第3回 シンポジウム「新三木市史に期待する」開催（三木市中央公民館）
29日	(農学)	農学研究科地域連携研究セミナー（A-Launch+） 「篠山フィールドステーションを拠点とした地域連携活動と今後の展望」

---

---

平成 27 年度 神戸大学地域連携活動発表会報告書  
平成 28 年 3 月発行

発行 神戸大学 地域連携推進室  
連絡先 〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1  
Tel:078-803-5427 Fax:078-803-5389  
Email:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

印刷 田中印刷出版(株)

---

---